

近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 3 分冊 5 ——

戸 木 遺 跡
小 戸 木 遺 跡

鳥 居 本 遺 跡
庄 村 遺 跡

1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター



戸木遺跡全景（西から）



戸木遺跡出土近世陶器

例 言

1. 本書は平成2年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内の遺跡発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる戸木遺跡・鳥居本遺跡他2遺跡の調査報告書（第3分冊の5）である。

2. 調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 調査の体制は下記のとおりである。

- ・調査主体三重県教育委員会
- ・調査担当三重県埋蔵文化財センター調査第2課第1係

次長兼調査第2課長山澤義貴

主査 新田 洋・主事河北秀実
主事 増田安生・主事齋藤直樹
技師 大川勝宏・主事伊藤裕偉
主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

川崎正幸（臨時調査員）・反町瑩子
采野妙子・谷久保美知代・吉村道子
山分孝子・白石みよ子・乾ひとみ
竹内由美・上村かおり・中山学・反町有子（室内作業員）
森田幸伸（皇學館大学学生）
近藤大典（ ）

4. 本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次、及び各文末にも明記した。なお、遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方からご指導・助言を賜った。記して謝意を表する。

（順不同、敬称略）

藤澤良祐（瀬戸市歴史民俗資料館）

5. 本書掲載の4遺跡については、既に刊行の「近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」（三重県教育委員会・1988.3）にその調査概報は公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。しかし、今回の報告については、戸木遺跡は遺構篇であり、鳥居本遺跡は63年度調査分である。

6. 本書に収録した各遺跡の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化センターで保管している。

7. 本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

S B 竪穴住居、掘立柱建物 S D 溝 S E 井戸
S K 土坑 P 柱穴、ピット

8. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

例 言
目 次
図 版 目 次
挿 図 目 次
表 目 次

I. 前 言	
1. 調査の経過	(河瀬 信幸) … 1
2. 調査及び整理の方法	(〃) … 1
3. 調査の体制	(〃) … 1
II. 位置と環境	(河瀬 信幸) … 6
III. 戸木遺跡	(河瀬 信幸) … 9
IV. 鳥居本遺跡	(小坂 宜広) … 48
V. 小戸木遺跡	(角谷 泰弘) … 64
VI. 庄村遺跡	(〃) … 66

図 版 目 次

戸 木 遺 跡		P L . 11	S E 89	44
P L . 1	A - 1 ・ 2 ・ 3 地区全景		S K 106	44
	A - 1 地区全景	P L . 12	S B 120, S K 122	45
P L . 2	A - 2 地区全景		S K 129 ・ 133, 南土壘	45
	A - 3 地区 (北半分)	P L . 13	東土壘	46
P L . 3	A - 3 地区 (南半分)		S B 136	46
	B - 2 地区 S D 137	P L . 14	出土遺物	47
P L . 4	B - 1 地区 S D 138	鳥 居 本 遺 跡		
	A - 2 地区全景	P L . 1	調査区全景	60
P L . 5	S B 15 ~ 19 周辺		S K 25	60
	S B 24 ~ 26, S K 29	P L . 2	S K 31	61
P L . 6	S B 34 ・ 35		S E 1 遺物出土状況	61
	S B 34 ・ 35, S K 33, S D 52	P L . 3	S K 27	62
P L . 7	S E 36 ・ 37, S D 38, S B 43 ~ 49 周辺		S D 3	62
	S E 36	P L . 4	出土遺物	63
P L . 8	S K 29 (集石), S K 59, S E 28	小 戸 木 遺 跡		
	A - 3 地区全景	P L . 1	調査区全景	65
P L . 9	S D 60 ~ 63		グリッド 2	65
	S B 78 ・ 79 周辺	庄 村 遺 跡		
P L . 10	S B 81 ~ 83, S D 80, S K 87 ・ 88	P L . 1	調査前風景	67
	S B 101 周辺			

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡分布図	6
戸 木 遺 跡		
第3図	遺跡地形図	9
第4図	調査区位置図	10
第5図	A-1～3地区割図	12
第6図	A-1～3地区遺構全体図	12
第7図	A-1地区遺構平面図	14～15
第8図	A-2地区遺構平面図	18～19
第9図	S B34・35・49実測図	20
第10図	A-3地区遺構平面図	24～25
第11図	S B79・101・120・136実測図	26
第12図	戸木遺跡周辺古地図	29
第13図	B-1・2地区, C地区遺構 平面図、C地区土層断面図	30～31

鳥 居 本 遺 跡		
第14図	遺跡地形図	48
第15図	調査区位置図	49
第16図	調査区地区割図	49
第17図	遺構平面図	50～51
第18図	調査区西壁土層断面図	52
第19図	S E 1 遺物出土状況実測図	53
第20図	S D 3・15断面図	54
第21図	S K 25・27・29・31実測図	55
第22図	出土遺物実測図	58
小 戸 木 遺 跡		
第23図	調査区位置図	64
庄 村 遺 跡		
第24図	調査区位置図	66
第25図	出土遺物実測図	66

表 目 次

第1表	遺構実測図、遺物実測図 整理番号一覧表	1
第2表	発掘調査遺跡一覧	5～6

第3表	雲出川中流・下流域の中世城館址	8
第4表	A-2地区 掘立柱建物一覧表	17
第5表	A-3地区 掘立柱建物一覧表	23

I. 前 言

1. 調査の経過

本書に掲載した戸木遺跡、鳥居本遺跡、小戸木遺跡、庄村遺跡は、昭和62年度および63年度に実施した。

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）にかかる埋蔵文化財発掘調査は、昭和59年度に現地調査を開始し、昭和61年度内には多気郡多気町地内の全ての遺跡と松阪市地内のほとんどの遺跡の発掘調査を終了し、久居市、一志郡嬉野町地内の第1次調査に入った。

昭和62年度からは調査地の重点を久居市、一志郡一志町・嬉野町地内に移した。昭和62年度には戸木

遺跡、鳥居本遺跡、天保遺跡、天保古墳群、堀之内遺跡などを実施し、昭和63年度は前年度から継続している遺跡の調査を中心に行い、第8次区間内にある遺跡の現地調査を終了した。

調査にあたっては日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、並びに、地元の各関係機関、地元自治会など各位より惜しみない援助をうけた。また、現地発掘調査にあたっては三重県土地開発公社よりひとかたならぬ力添えがあった。ともに記して心より感謝申し上げる。

2. 調査および整理の方法

現地調査の方法については第1分冊を参照された。また、資料整理も第1分冊に示した方法により実施したのでここでは略するが、各遺跡の遺構実測

図と遺物実測図およびピックアップ遺物には第1表のように6ケタの番号を与えて整理した。

3. 調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。

以下は昭和62・63年度の調査体制である。

昭和62年度

文化財第二係長 伊藤久嗣 総括

技 師 新田 洋 調整・協議、焼野遺跡ほか

主 事 山下 雅春 戸木遺跡ほか

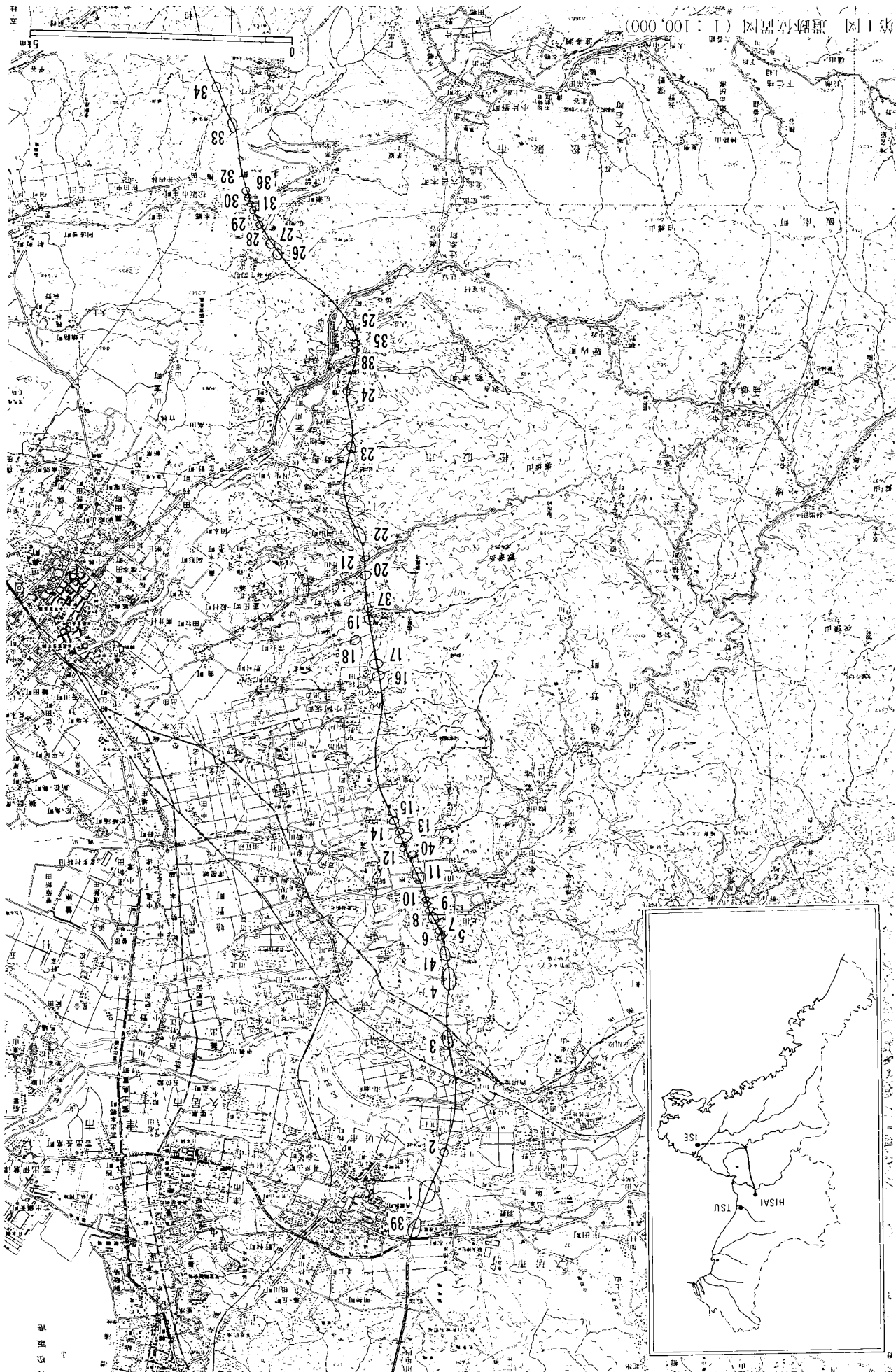
田中喜久雄 戸木遺跡

遺跡番号	遺跡名	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図
39	戸 木 遺 跡	39-0001~39-0024	
3	鳥 居 本 遺 跡	3-2001~3-2049	3-5001~5025
1	小 戸 木 遺 跡		1-0001
2	庄 村 遺 跡		

第1表 遺構実測図、遺物実測図整理番号一覧表

主	事	河北秀実	堀之内遺跡ほか	室内整理員	山際みち子
	〳	増田安生	天保遺跡ほか		孝久由希子
	〳	田村陽一	天保遺跡ほか		小坂規美子
	〳	宮田勝功	鳥居本遺跡ほか		
	〳	野田修久	天保古墳群ほか		
臨時調査員		木許 守		調査指導	(62・63年度、順不同、敬称略)
室内整理員		谷久保美知代		木下正史	(奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部)
	〳	近藤豊美		大脇 潔	(奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官)
	〳	山本紀子		千葉 豊	(京都大学埋蔵文化財調査研究センター)
	〳	大西友子		八賀 晋	(三重大学教授)
	〳	野崎栄子		三辻利一	(奈良教育大学教授)
	〳	中谷とも代		堅田 直	(帝塚山大学教授)
	〳	東千恵子		伊藤秋男	(南山大学教授)
	〳	山際みち子		西山要一	(奈良大学助教授)
	〳	孝久由希子		安孫子昭二	(東京都文化課 学芸員)
昭和63年度				石黒立人	(財愛知県埋蔵文化財センター)
文化財第二係長		伊藤久嗣	総括	小玉道明	(三重県総務部学事文書課主幹)
技 師		新田 洋	調整・協議、西野 7号墳	広瀬和久	(三重県農業技術センター)
主	事	田中喜久雄		原 正之	(三重県農業技術センター)
	〳	河北秀実	鳥居本遺跡	磯部 克	(県立津西高校教諭)
	〳	田村陽一	堀之内遺跡	奥 義次	(度会町教育委員会)
	〳	小坂宜広	ビハノ谷遺跡ほか	藤澤良祐	(瀬戸市歴史民俗資料館)
	〳	山崎恒哉	西野7号墳	発掘調査土木工事部門担当	
	〳	野田修久	天保古墳群ほか	三重県土地開発公社	
室内整理員		谷久保美知代		堀内信吾	
	〳	近藤豊美		稲葉庄衛	
	〳	大西友子		浜口安光	
	〳	野崎栄子		中田辰実	
	〳	東千恵子			(河瀬信幸)

第1图 惠野位置图 (1:100,000)



番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要	
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	計432	62. 3. 3～ 3. 5 62. 9. 20～ 9. 24	宮田 勝功 木許 守	遺構・遺物なし(試掘) 〃 (〃)	
			240					
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9. 14～ 9. 20	新田 洋	遺構なし・遺物微量(試掘)	
3	鳥居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9. 24～63. 3. 7 63. 5. 16～ 7. 27	宮田 勝功 小坂 宜広 河北 秀美	弥生中期方形周溝墓など検出 飛鳥時代の井戸検出	
			2,640					
4	西野7号墳 (天花寺古墳群)	嬉野町天花寺		3,400	62. 11. 9～11. 31 63. 5. 16～ 9. 28	新田 洋 新田 洋 山崎 恒哉	(山林伐開) 石鏡・車輪石片出土、前期の古墳1基	
5	焼野(1山田)古墳	嬉野町島田		2,010	62. 7. 11～ 9. 30	山下 雅春	古墳は畑寄せによる盛土と判明、石核出土(試掘)	
6	焼野(1山田)遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5. 11～ 8. 24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出	
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の 竪穴住居など検出	
8	天保(一志西部)遺跡C区	嬉野町島田		5,000	62. 5. 18～ 6. 30	増田 安生	奈良～平安時代の竪穴住居など検出	
9	天保(天保館跡)遺跡D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8. 12	増田 安生	〃	
10	天保古墳群 (含、天保遺跡E区)	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7. 12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴石室墳など	
11	堀之内遺跡	A区	嬉野町堀之内	1,450	14,250	62. 2. 23～ 3. 13	新田 洋	(側道部分の調査)
				2,200		62. 5. 6～ 7. 16	河北 秀美	古墳～平安時代の住居跡など検出
		2,200	62. 7. 23～10. 1	河北 秀美		古墳～平安時代の溝など検出		
		5,400	62. 9. 1～63. 3. 19	増田 安生		弥生後期竪穴、平安の掘立など検出		
		700	62. 10. 25～11. 20	木許 守		古式土師器出土、ヤナ状遺構検出		
		1,900	63. 5. 18～ 8. 13	田村 陽一		縄文中・後・晩期の土器多数出土		
400	62. 5. 20, 6. 29～ 7. 22	河北 秀美	(調査区南端、北端部の試掘)					
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀美	(試掘)	
			507		62. 5. 6～ 6. 5	河北 秀美	掘立柱建物3棟検出	
13	東峽遺跡 (ビハノ谷古墳群)	嬉野町薬王寺	1,000	13,000	62. 3. 2～ 3. 30	野原 宏司	(山林伐開、表土掘削)	
			12,000		62. 5. 19～ 8. 12	野田 修久 木許 守	古式土師器出土、後期古墳1基	
14	女生谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺	4,031	7,171	61. 12. 15～62. 2. 21	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)	
			3,140		62. 5. 7～ 7. 11	木許 守 野田 修久 山下 雅春	古式土師器出土 後期古墳4基	
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2. 18～ 2. 24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)	
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60. 11. 12～11. 20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)	
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60. 11. 15～11. 25	野原 宏司	(試掘)	
			4,400		60. 12. 27～61. 3. 25	野原 宏司	縄文後期土器出土	
18	垣内田古墳群 (垣内田遺跡)	松阪市岩内町	428	6,528	60. 11. 26～12. 12	野原 宏司	(試掘)	
			5,500 600		60. 12. 27～61. 3. 25 61. 6. 30～ 7. 30	吉水 康夫 野田 修久	横穴式石室墳を主体とする古墳群	
19	藪ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1～ 3. 25	田村 陽一	(試掘)	
			1,400		61. 6. 30～10. 3	田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土	
20	椋長遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60. 10. 18～10. 24	田村 陽一	(試掘)	
			2,404		60. 11. 26～61. 3. 18	河北 秀美	奈良～平安時代の竪穴住居検出	

第2表 発掘調査遺跡一覧(太ゴチックは本書所収遺跡)

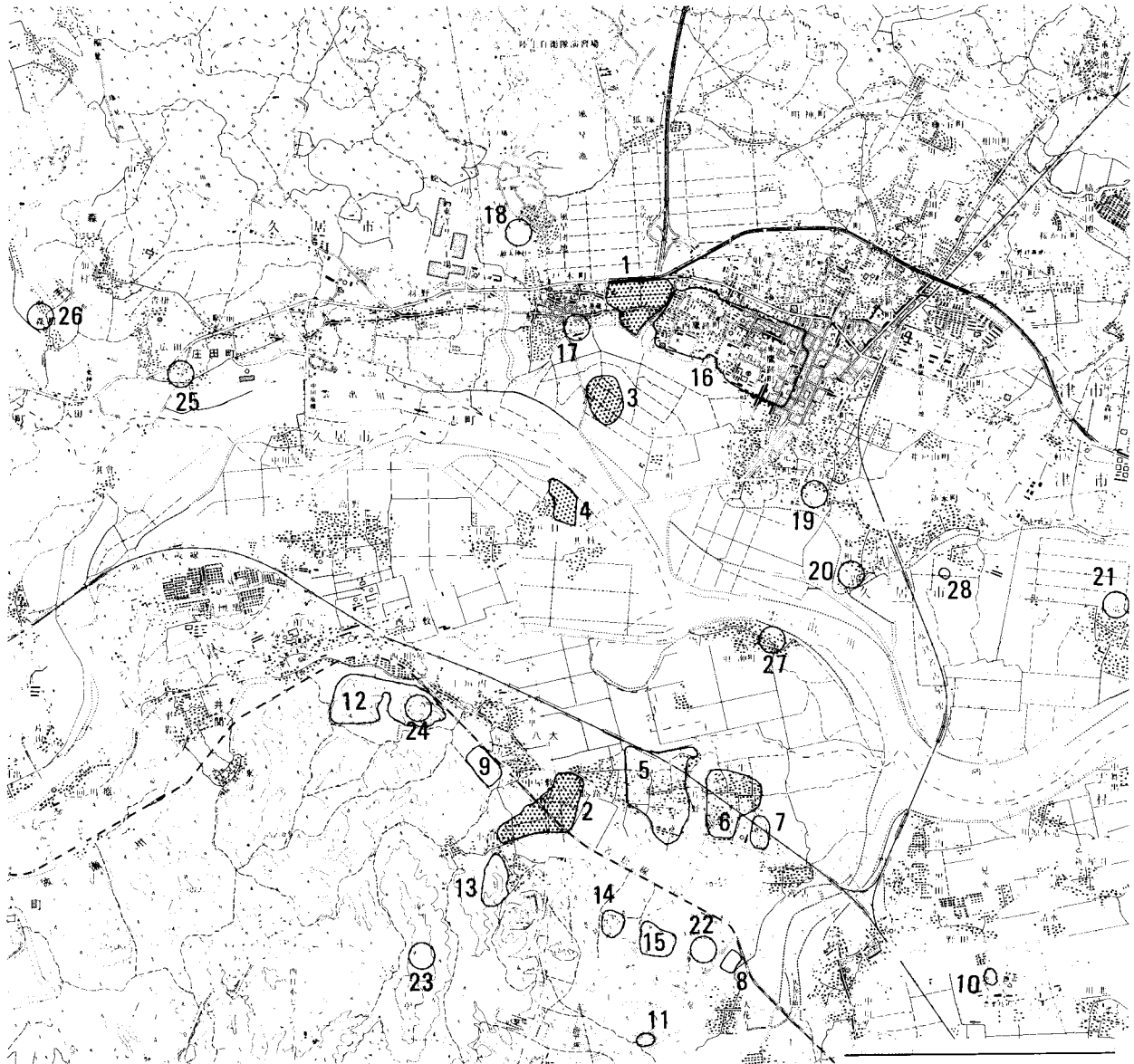
番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾(西野)墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27	田阪 仁 宮田 勝功	500基におよぶ中世墓群
			2,500		61. 5. 31～12. 5	田中喜久雄 宮田 勝功	後期小型円墳(横穴式石室)2基 後期小型方墳(木棺)2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60. 10. 25～10. 26	田村 陽一	(試掘)
24	坂東(大河内5号)古墳	松阪市笹川町		180	61. 7. 23～ 8. 19	野田 修久	中世土器片微量。古墳にあらず(試掘)
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2. 25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広(森下池西方)遺跡	松阪市広瀬町	224	1,360	60. 3. 22～60. 3. 31	上村 安生 田阪 仁 宮田 勝功	(試掘)
			1,136		60. 7. 1～60. 10. 14	田村 陽一 野原 宏司	先土器末～縄文時代の石器 多数出土
27	大原堀(大原堀南方)遺跡	松阪市広瀬町		114	60. 10. 28～60. 10. 31	田村 陽一	遺構、遺物微量(試掘)
28	花ノ木(山崎)遺跡	多気町牧	52	5,852	59. 12. 10	田村 陽一 杉谷 政樹	(試掘)
			5,800		60. 1. 28～60. 3. 26	田村 陽一	弥生時代中期竪穴住居、方形周溝杉谷政樹墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44	1,044	59. 12. 10	高見 宜雄 田村 陽一	(試掘)
			1,000		60. 1. 28～60. 2. 23	田阪 仁	土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3. 25～60. 3. 31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量(弥生土前期器)(試掘)
31	牧瓦窯群 1・2・3号窯	多気町牧	960	1,160	60. 7. 1～60. 10. 31	田中喜久雄 河北 秀実	奈良時代の瓦 専用窯
	4・5・6・8号窯	多気町牧・鍬形			60. 11. 30～61. 3. 25	田中喜久雄	1号………平窯
	7号窯	多気町鍬形	200		61. 6. 9～61. 8. 15	野原 宏司	2～8号…登窯
32	釈尊寺(中牧)遺跡	多気町鍬形	144	1,144	60. 11. 1～60. 11. 12	田村 陽一	(試掘)
			1,000		60. 12. 5～61. 2. 28	田村 陽一	掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88	7,588	59. 12. 6～12. 8	増田 安生 杉谷 政樹	(試掘)
			7,500		60. 1. 28～ 3. 28	吉水 康夫 河瀬 信幸 上村 安生	石鏃・石匙・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59. 12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし(試掘)
35	岩谷遺跡(養徳寺跡)	松阪市矢津町	740	5,440	61. 2. 27～ 3. 25	田阪 仁	五輪塔など出土。寺(養徳寺)跡の伝承に裏づけ。
			4,700		61. 8. 20～62. 3. 18	野原 修久	
36	鍬形(牧)中世墓群	多気町鍬形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9. 20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	楯垣外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10. 18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	戸木(久保屋敷)遺跡	久居市戸木町		12,000	62. 9. 1～63. 3. 31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土壘状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4. 11～ 5. 11	小坂 宜広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡	嬉野町天花寺		2,473	63. 7. 12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土(試掘)
	北広遺跡	嬉野町天花寺					サヌカイト製尖頭器片出土(試掘)

※調査総面積は151,715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

Ⅱ. 位置と環境

伊勢平野のほぼ中央部を流れる一級河川雲出川は、三重・奈良両県境にある高見山地三峰山付近に源を發し、大きな蛇行を繰り返しながら北東に流れ伊勢湾に注いでいる。雲出川は中流付近では河岸段丘を發達させているが、下流域にさしかかる久居市庄田

町、一志町高野あたりからは肥沃な沖積低地を發達させており、雲出川に臨む低位段丘面及び中位段丘面と合わせて人々が生活を営む上で良好な地域を形成させている。この様な地域であるので、この地域周辺には各時代の遺跡が広く分布しており、以下に



第2図 遺跡分布図 (1 : 50,000) (国土地理院、津西部・大仰 1 : 25,000)

- | | | | | |
|----------|------------|------------|----------|-------------|
| 1. 戸木遺跡 | 7. 平生南遺跡 | 13. 小山古墳群 | 19. 川方城 | 25. 庄田城 |
| 2. 鳥居本遺跡 | 8. 天花寺廢寺 | 14. 片野池古墳群 | 20. 牧城 | 26. 森城 |
| 3. 小戸木遺跡 | 9. 班光寺跡 | 15. 赤坂古墳群 | 21. 木造城 | 27. 須賀瀬城 |
| 4. 庄村遺跡 | 10. 西山古墳 | 16. 久居城 | 22. 天花寺城 | 28. 長持元屋敷遺跡 |
| 5. 片野遺跡 | 11. 筒野古墳 | 17. 戸木城 | 23. 小山城 | |
| 6. 平生遺跡 | 12. 西出山古墳群 | 18. 宮山城 | 24. 八太城 | |

その歴史的環境を概観してみたい。

雲出川流域は県下に於いても先土器から縄文時代にかけての石器、あるいは土器が採集される屈指の水系である。しかしそれはまだ体系的に整理されておらず、近年増加しつつあるこの流域の発掘調査例をも含めての整理作業が今後の課題であろう。

弥生時代になると水稲耕作等の伝播もあり、沖積低地への進出が見られ、この地域でも雲出川や中村川、波瀬川などにより形成された沖積地及びその周辺の中・低位段丘面上に広い面積をもつ遺跡が分布するようになる。中でも片野遺跡^①(5)、鳥居本遺跡^②(2)、長持元屋敷遺跡^③(28)などはその代表的なものであろう。長持元屋敷遺跡では前期の方形周溝状遺構と後期の竪穴住居が検出されており、雲出川氾濫原に位置することが特筆される。片野遺跡では中期に属する竪穴住居が検出され、方形周溝墓も数基検出されたが、その中の1基は中期前半と考えられ、県内最古に位置付けられている。その他鳥居本遺跡でも中期の方形周溝墓が確認されるなど、弥生時代の遺跡には見るべきものが多い。

古墳時代になると周辺の丘陵上に前・後期を通じて単独に、或いは群集して古墳が営まれるようになる。前期で代表されるのは、西山^④(10)・筒野^⑤(11)・向山^⑥・銚山^⑦の各古墳であろう。いずれも前方後方墳というこの地域では特異な形態をもつもので、古墳時代前期のこの地域の様相を考える上で重要な意味をもつものである。後期に入ると、単独ではなくそのほとんどが群集して古墳が営まれており、小山古墳群(13)、片野池古墳群(14)など多くの古墳群が分布している。集落跡として確認された代表的な遺跡は片野遺跡である。片野遺跡では後期の竪穴住居が20数棟検出されており、前述の丘陵上に群集墳を営んだ人々の集落の一部と見てさしつかえあるまい。

飛鳥～平安時代の当地域は畿内から東国への交通の要衝として重要な意味をもち、畿内文化流入の門口であったと考えられている。したがって伊勢国の中でも寺院跡が多く見られ、天花寺廃寺^⑧(8)などはその顕著な例である。さらに集落跡としても飛鳥時代の竪穴住居を検出した鳥居本遺跡や、堀立柱建物などが検出された平生遺跡^⑨(6)があり、その他

奈良～平安時代を通じての遺構・遺物も片野遺跡、堀田遺跡、長持元屋敷遺跡などで確認されている。特に出土土器では畿内の要素が随所に見受けられる。また、古代条里制の名残りも波瀬川右岸に見られ、一志郡家や一志頼宮などその所在地も嬉野町宮古地区に比定されている。

中世、特に南北朝の動乱以降、この地域を含む南伊勢は伊勢国司としての北畠氏の支配を受けるようになる。北畠氏は現美杉村の多氣に拠り、その勢力範囲は南伊勢の5郡(一志・飯高・飯野・多氣・度会)を中心とし西は伊賀の南半から大和の宇陀郡、南は志摩・奥熊野にも及ぶものであった。しかし、北伊勢は北朝方に属し、安濃郡の長野氏、鈴鹿郡の関氏などがそれぞれの地に拠っていた。従って雲出川が両勢力の境界線を形成することになり、雲出川を挟んでの攻防が展開されたのである。その間には両勢力ともに適所に城砦等を築いたものと考えられる。北畠氏も波瀬(現一志町)、木造、阿射賀(阿坂)、大河内(現松阪市)、田丸などに支城を、その他郡内に城砦を構えた。中でも木造城(21)に拠った北畠氏一族である木造氏は、木造城を中心として至第に勢力を拡げ、その所領は雲出七郷、七栗七郷、野辺、藪倉(其倉)、木造、大仰、片野、牧、新家、戸木、石橋、川方など雲出川北岸を主なものとする12ヶ村に及ぶといわれている。こうした中で木造氏は北畠宗家との抗争をも交えながら戦国時代を迎え、織豊期には織田・豊臣の傘下に入り北畠宗家と敵対した。しかし、豊臣氏との不和に陥った木造氏は、戸木城^⑩(17)に籠城して戦火を交えたが長期戦の末、天正12年(1584)に落城し、木造氏は勢力を失ったのである。

豊臣氏支配下の当地域は、支配者の度重なる交錯などもあり、しばらくは不定定な状況が続くことになる。しかし、江戸幕府が開かれ、その幕藩体制が確立されると現久居市を中心とする大部分が慶長13年(1608)以降藤堂氏の津藩領となった。その後、寛文9年(1669)に津城主藤堂高虎の孫高次の三男高通が分封され、久居に築城(16)、翌年入府し、雲出川を挟んだこの地域のほとんどは久居藩領に組み入れられ近代を迎えることになるのである。

(河瀬信幸)

地区	名称	所在地	立地	時代	城館主
波瀬川流域	波瀬館城	一志町波瀬字室ノ口	平地	永禄	波瀬藏人具柘
	波瀬丸城	〃 波瀬字井ノ口	山地	応永	木造雅俊
	波瀬上城	〃 波瀬字出丸	山地	永禄	出丸四郎国道
	波瀬八太城	〃 波瀬字野口	丘陵	建仁	平家盛
	波瀬小山城	〃 八太字板取谷 〃 小山字三谷	山地 山地	永禄 永禄	山上讃岐守 大多和兵部少輔
島田川流域	小原城	嬉野町小原字平野	山地	—	北畠房雄
	宮野城	〃 宮野字古田	—	—	北畠氏
	滝川城	〃 滝之川字小甚吾	山地	—	明光院
	森本城	〃 森本字向山	平地	永禄	木造俊重
	釜生田城	〃 釜生田字城山	丘陵	—	—
	嶋田城	〃 嶋田	—	—	—
	八田城	〃 八田字城山	山地	永禄	大多和監物
	天花寺城	〃 天花寺字堀田	台地	永禄	天花寺氏
雲出川中流・下流域	榊原城	久居市榊原町字赤部谷	山地	—	榊原信濃守
	七栗一色館	〃 一色町字馬屋敷	平地	—	服部民部少輔
	森城	〃 森町字森垣内	丘陵	—	堀宮内
	庄田城	〃 庄田町字上出	丘陵	元久	庄田氏
	戸木城	〃 戸木町字桃里	台地	天文	木造具政
	官山城	〃 戸木町字敏太	丘陵	天文	木造具政
	川方城	〃 川方町字里ノ内	台地	明応	川方康親
	牧造城	〃 牧町字西馬場山	台地	文安	牧康信
	須賀瀬城	〃 須賀瀬町字大通	平地	正平	木造氏
	矢野合城	香良洲町矢野字地家垣内	平地	—	渡辺筑後守
	星合原城	三雲村星合字里中	平地	永正	矢野下野守
曾原城	〃 曾原字城屋敷	平地	嘉吉	星合氏 天花寺氏	

第3表 雲出川中流・下流域の中世城館址——は城址所在地不明
 (『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会より転載)

〔註・参考文献〕

- ① 河瀬信幸『片野遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1985
 - ② 吉村利男・稲生進・『鳥居本遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会 1975
 - ③ 辻富美雄『長持元屋敷遺跡調査報告』久居市教育委員会 1980
 - ④ 「一志郡筒野・西山両前方後方墳について—三重県主要古墳調査」『ふびと』20号 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1963
 - ⑤ 註④参照
後藤守・『伊勢・一志郡豊地村の二古式古墳』『考古学雑誌』14-3 1923
 - ⑥ 「一志郡向山前方後方墳について—三重県主要古墳調査」『ふびと』20号 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1967
註⑤の後藤論文
 - ⑦ 伊勢野久好『三重の前方後方墳』『古代』第86号 早稲田大学考古学会 1988
 - ⑧ 山田猛『天花寺廃寺遺跡』『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981
 - ⑨ 服部貞蔵・吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団 1976
 - ⑩ 小玉道明・吉村利男『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会 1979
- その他、この項に書くに際し、下記の文献を参照した。
- ① 早川裕己『堀田遺跡』『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982
 - ② 弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979
 - ③ 大西源一・鈴木敏雄ほか『一志郡史・上巻』一志郡町村会 1955
 - ④ 『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
 - ⑤ 『久居市史・上巻』久居市役所 1972
 - ⑥ 大西源一『北畠氏の研究』(復刊版) 松阪郷土史料刊行会 1982
 - ⑦ 『三重県の地名』日本歴史地名大系・24 平凡社 1983
 - ⑧ 『角川日本地名大辞典』24・三重県 角川書店 1983

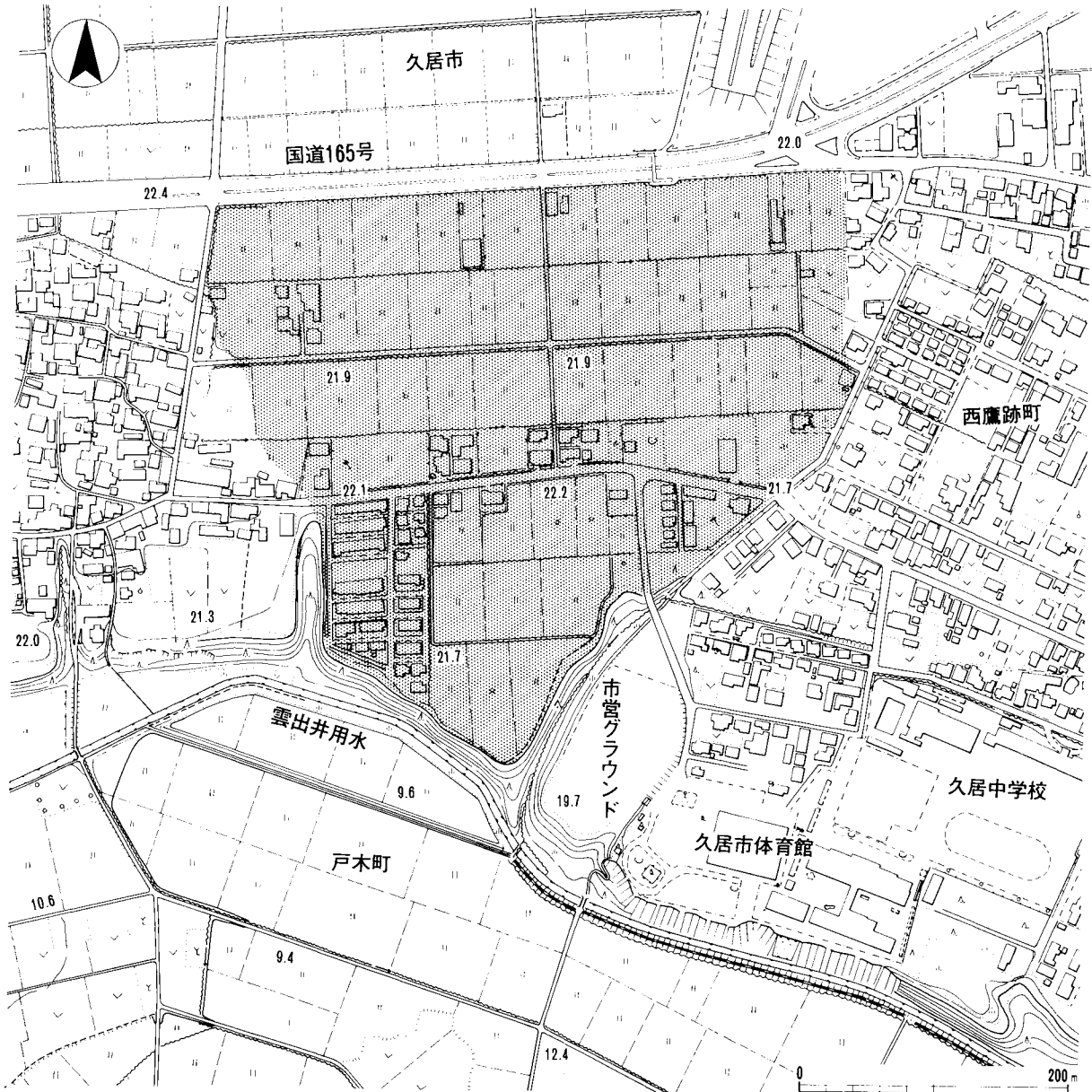
Ⅲ. 久居市戸木町 戸木遺跡

1. はじめに

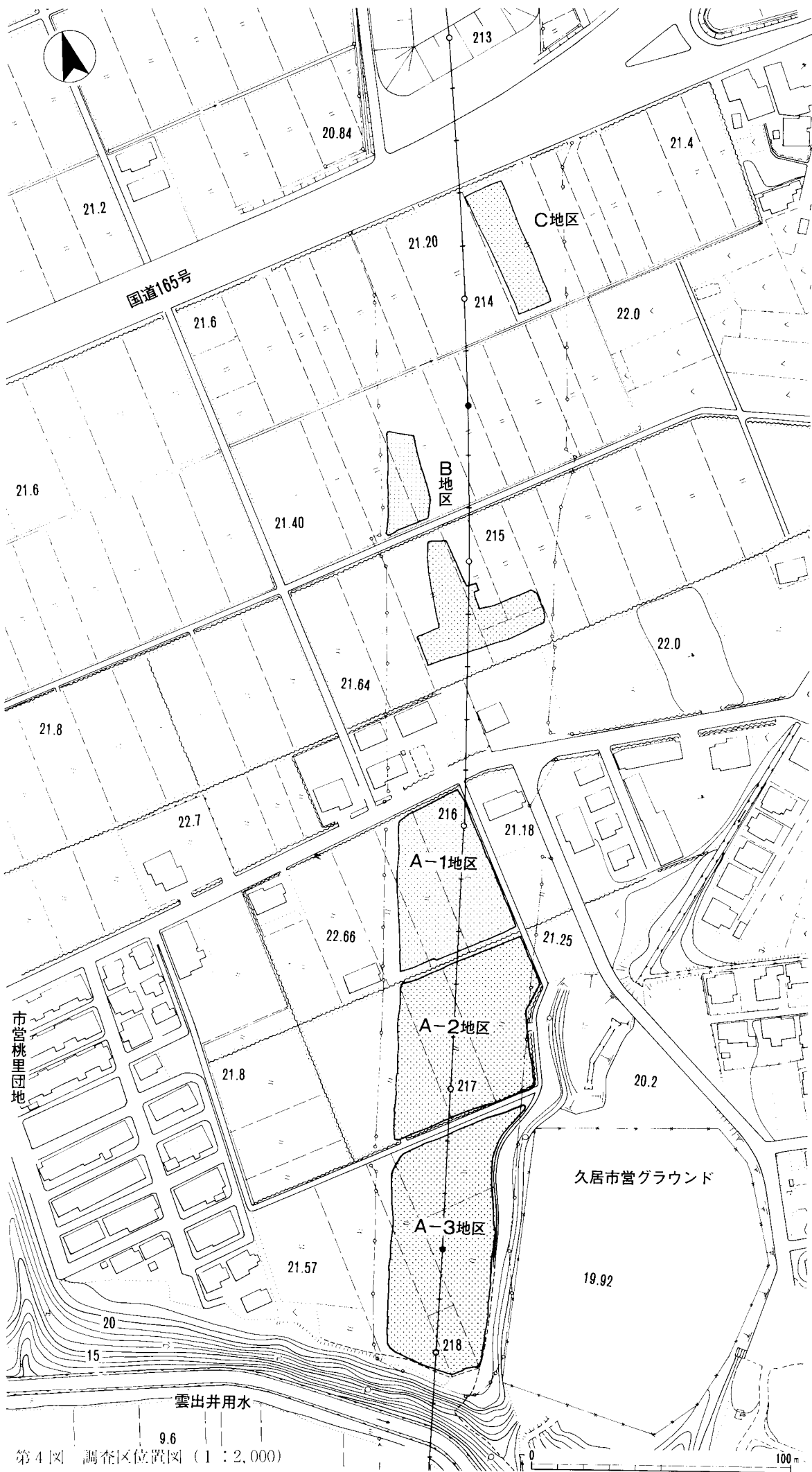
戸木遺跡は行政上久居市戸木町字久保屋敷・桃里に所在し、現況は水田である。当遺跡は昭和62年度事業中に新発見された遺跡で、久居市～勢和村間で第39番目の遺跡にあたり、その面積は水田地帯を中心に約100,000㎡の広がりをもっている。62年9月から試掘調査を実施し、その結果をもとに関係機関

と協議をもち、10月から発掘調査を開始し、翌63年3月末日に終了した。発掘区は、市道久居～戸木線以南をA区、同市道以北で国道165号線以南の農道を境として、南からB区、C区とし、A・B・Cの3地区の発掘調査面積は合計約12,000㎡となった。

遺跡は、雲出川によって形成された肥沃な低位沖



第3図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第4図 調査区位置図 (1:2,000)

積地を望む左岸の標高約20mの中位段丘面上の平坦地に位置し、比高差約10mの崖下には江戸時代中期に開鑿され、現在も通水する雲出井用水が流れ、灌漑用水として広く利用されている。この付近での段丘崖はほぼ東西に大きく弧を描くように形成され、そして幅約200m毎にこの崖面とほぼ直交するように奥行約100m、幅約30m、深さ約10mの形状がよく

似た小谷が開析される。遺跡東側の小谷は、久居藩藤堂家陣屋(久居城)の西の空堀として利用されていたが、現在は埋立てられ市営グラウンドとなっている。御殿跡地には久居中学校が建設されている。そしてまた戸木遺跡が位置するこの段丘崖上には、西に中世の雄北畠氏一族木造氏の戸木城が、さらに東には木造氏一族の支城川方城、牧城が連なっている。

2. 調査方法

調査地域は道路などの制約により大きくA・B・Cの3地区に分けた。そしてその中でもA・B地区に関しては、さらに畦畔・溝等を境にしてA地区は北からA-1・A-2・A-3地区とし、B地区も北からB-1・B-2地区とした。

調査に際しての4m×4mの方眼による地区割はA地区のみに設定し、センター杭STA216とSTA218がほぼ直線であるので、この2点を基準と

した。そして、原則に従い西から東へアルファベット、北から南へ数字を与え、各地区の北西隅の杭を地区名とした。

表土除去は重機によったが、A地区のみはかつての耕地整理により遺物包含層と遺構上面は削平を受けてすでになくなっており、現耕作土直下が遺構検出面であった。

3. 遺 構

A-1地区

A-1地区で検出された主な遺構は、室町時代末期から江戸時代初頭にかけての土坑4基、井戸1基、溝2条、江戸時代前期から中期の土坑4基、井戸1基、その他時期は不明であるものの江戸時代には属すると考えられる井戸1基などがある。

遺構は耕作土を取り除いた直下、深さ20~30cmの淡褐色土上面で検出された。

1. 室町時代末期から江戸時代初頭の遺構

A. 土 坑

SK7 長径6.0m以上、短径4.4mの長円形を呈すると推定され、深さは20~54cmである。出土遺物は土師器鍋片が多く、その他に染付碗片などが若干ある。

SK8 長辺2.2m、短辺70~90cmの長方形で、深さは18cmと比較的浅い。出土遺物は少なく、土師器鍋片などがあるのみである。

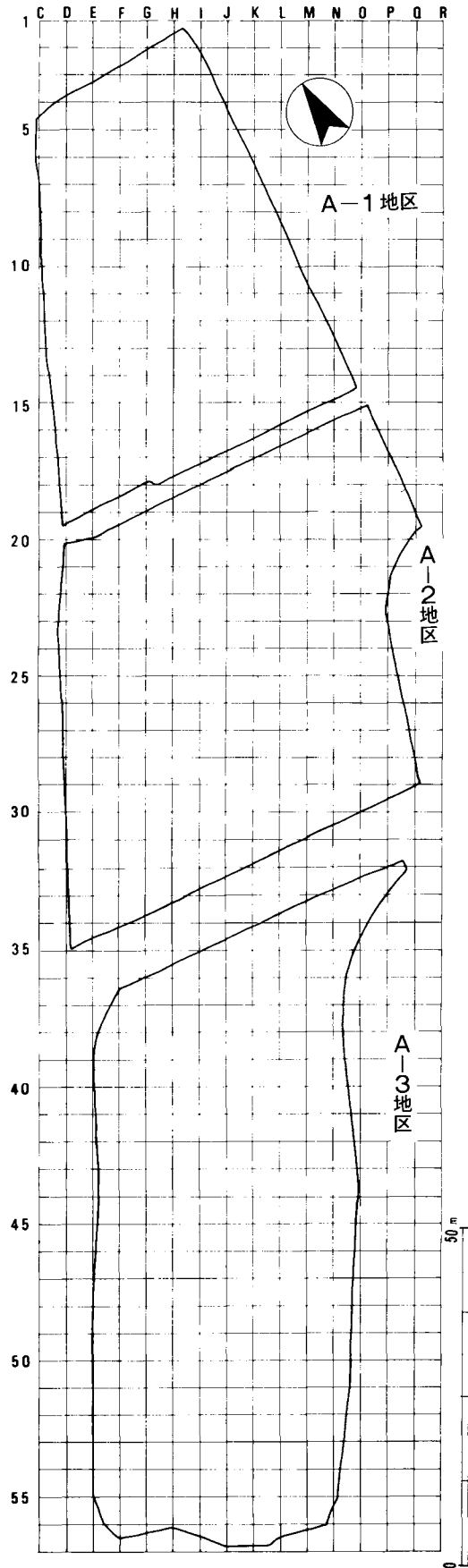
SK9 一辺0.9~1.0mの隅丸方形で、深さは30cmである。常滑鉢片や土師器鍋片が出土しているが量としては少ない。

SK10 一辺0.8~1.1mの中央部がやや膨んだ長方形を呈し、深さは34cmである。土坑内には集石が見られた。天目茶碗片が若干出土している。土坑や集石のもつ性格は不明であるが、隣接して検出された同時期の集石のないSK8・9とは別の機能があったのかも知れない。

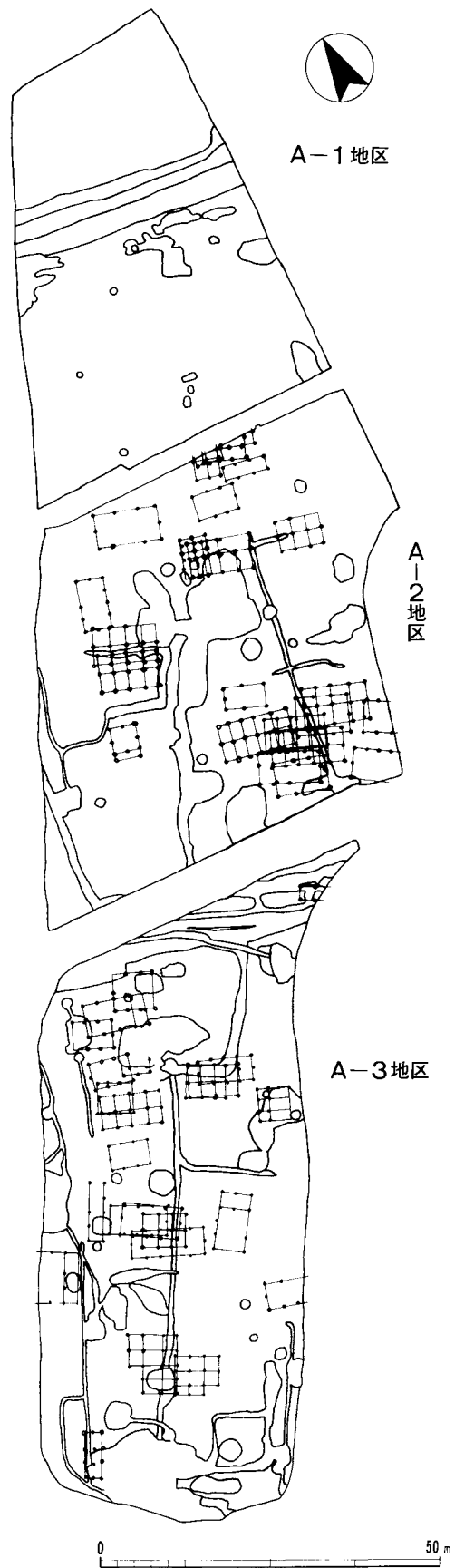
B. 溝

SD1 発掘区中央やや北で検出された東西に走る溝で、幅1.0~2.0m、深さは10~30cmでやや浅い。出土遺物は比較的多く、土師器鍋片、山茶碗片、山茶碗小皿、染付碗片、天目茶碗などが見られる。

SD2 SD1と平行して検出された東西に走る溝で、幅3.1~3.8m、深さ30~50cmとSD1に比べやや規模が大きい。山茶碗、播鉢片などに混って



第5图 A-1~3地区割图 (1:1,000)



第6图 A-1~3地区遺構全体图 (1:1,000)

瓦片も出土しており、また美濃系の陶器皿も出土している。SD1とSD2からの出土遺物には若干の時期差が見られるが、2条の溝は同時に存在していたと考えられ、幅2.0～2.5mの両溝間には所々に石が敷かれたような箇所があり、溝は側溝として、その間は道路として利用されていた可能性がある。そしてそれとともに区画溝的な役割があったのかも知れない。

C. 井戸

SE13 堀形は径90cmのほぼ円形の素掘り井戸である。深さ1.5～2.0m程度で崩落の危険があり、それ以上の掘り下げは断念した。常滑大甕片が比較的多く出土している。

2. 江戸時代前期から中期の遺構

A. 土坑

SK5 発掘区中央で検出された不定形な土坑である。検出段階では切り合い関係が確認できなかった。数基の土坑が切り合っている可能性もあるが、いずれも同時期のものであろう。出土遺物には瀬戸・美濃系の香炉などがあるが、量はさほど多くはない。

SK6 発掘区東壁によって切られるため規模は不明であるが、長径6.0m以上、短径3.9mの長円形と推定され、深さは36～40cmである。瀬戸輪禿皿・丸碗などが出土している。

SK4 発掘区西壁中央付近で検出された不定形土坑で、全体規模は不明であるが、深さは34～86cmと幅がある。この土坑も数基のあまり時期的に差のない土坑が切り合っていると考えられる。出土遺物は多く、瀬戸腰鍔碗、唐津系陶器片、堺系播鉢片、その他瓦片、大甕片などの各種がある。

SK3 長辺1.4m、短辺90cmで規模は小さく、深さは15cmである。瀬戸・美濃系の炉明皿が完形で1点出土している。

B. 井戸

SE11 径80cmのほぼ円形で、深さは1.5～2.0mの堀形をもつ素掘り井戸である。深さ1.5～2.0mの所で堀形が膨らみをもち、湧水もありそれ以下への掘り下げは断念した。瀬戸・美濃系の片口鉢などが少量出土している。

3. その他、時期不明の遺構

A. 井戸

SE12 径1.0mのほぼ円形で深さは1.5～2.0mの堀形をもつ素掘り井戸である。出土遺物は土師器片が微量あるのみである。

SE14 径1.2mのほぼ円形で、深さは1.5～2.0mの堀形をもつ素掘り井戸である。出土遺物には若干の山茶碗片、天目茶碗片などがある。

SE12・14ともいずれも完掘が不可能であった井戸である。出土遺物が少なく時期については不明といわざるを得ない。



第7図 A-1地区遺構平面図(1:200)

A-2地区

A-2地区で検出された主な遺構は、室町時代末期から江戸時代初頭に属すると考えられる、堀立柱建物25棟、土坑6基、溝2条、江戸時代前期から中期の土坑3基、溝1条、井戸5基などであり、室町時代末期以前の遺構は見られない。

遺構の検出は耕作土直下20~30cmの淡褐色土上面で行ったが、若干ではあるが遺物包含層も認められた。

1. 室町時代末期から江戸時代初頭の遺構

A. 堀立柱建物

S B17 東西棟。4×1間で、桁行6.3m、梁行2.1m、柱間は桁行1.8m+2.4m+2.1mの不等間である。柱堀形は径20~55cmの円形・楕円形で、深さは18~51cmであり、北東隅の柱穴には柱痕跡が残る。柱堀形内から若干の土師器片とともに天目茶碗片が出土している。

S B20 東西棟。4×2間で、桁行9.2m、梁行5.0m、柱間は桁行2.1m×2+2.5m×2の不等間、梁行は2.5mの等間である。柱堀形は径30~60cmの円形及び楕円形など不揃いであり、深さは10~30cmである。北東隅、南東隅、南側桁行西から2列目の柱穴に柱痕跡が残るが、北側桁行西から2列目の柱穴が検出できなかった。柱堀形から少量の土師器皿片が出土している。

S B26 東西棟。4×2間の総柱建物で、桁行は9.3m、梁行は5.1m、柱間は桁行2.4m+2.1m+2.4m×2の不等間であり、梁行も2.4m+2.7mの不等間である。柱堀形は径25~60cmの円形・楕円形と不揃いであり、深さは4~45cmと幅がある。中央柱列の柱穴には根石が残る。柱堀形内から土師器羽釜片、常滑甕、天目茶碗などが出土している。

S B27 東西棟。北側柱通り1間分の柱穴は検出出来なかったが、3×2間の総柱建物と推定する。桁行は6.3m、梁行4.6m、柱間は桁行2.2m×2+2.1m、梁行は2.2m+2.4mの不等間である。柱堀形は径25~50cmのほぼ円形に近く、深さは11~48cmである。柱堀形内からは土師器片が若干あるのみであ

る。

S B34 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行は9.3m、梁行は5.4m、柱間は桁行2.5m+2.4m+2.5m+1.9mの不等間で、梁行は2.7mの等間である。柱堀形は径55~65cmの円形・楕円形であり、深さは30~53cmと比較的揃っている。6ヶ所の柱穴に柱痕跡が残る。柱堀形から土師器鍋片が少量出土している。

S B35 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行8.7m、梁行5.4m、柱間は桁行2.1m×2+2.4m+2.1mの不等間で、梁行は2.7mの等間である。柱堀形は径45~70cmの円形・楕円形で、深さは24~64cmとやや幅があるものの比較的まとまっており、柱穴の6ヶ所に柱痕跡が残っている。柱堀形内から常滑鉢の底部などが出土している。S B34・35はその規模や柱堀形などが類似し、重なって検出されたことから建て替えの可能性も考えられる。

S B40 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行9.5m、梁行5.8m、柱間は桁行2.1m+2.2m+2.7m+2.5mの不等間で、梁行は2.9mの等間である。柱堀形は径30~70cmの円形・楕円形・方形など不揃いであり、深さは24~57cmとやや幅がある。北東隅の柱穴に根石があり、西側梁行中央の柱穴に柱痕跡が残る。柱堀形内から土師器鍋・皿片が若干出土している。

S B41 東西棟。3×2間で、桁行7.6m、梁行5.7m、柱間は北側桁行2.7m+2.4m+2.5m、南側桁行2.4m+2.7m+2.5mの不等間、梁行も3.0m+2.7mと不等間である。柱堀形は径25~50cmの円形・楕円形で、深さは42~50cmでややまとまっている。柱堀形内から土師器鍋・羽釜片が出土している。

S B44 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行8.8m、梁行4.9m、柱間は桁行1.9m+2.0m+2.5m+2.4m、梁行は2.2m+2.7mのそれぞれ不等間である。柱堀形は径25~50cmの楕円形であり、深さは31~44cmである。南側桁行西から2列目に根石と考えられる石が2個残っている。柱堀形内から若干の土師器鍋が出土している。

S B45 東西棟。5×2間の総柱建物である。桁行10.4m、梁行5.4m、柱間は桁行1.8m×3+2.7m+2.3mと不等間で、梁行は2.7mの等間である。柱堀形は径35~75cmの不整な楕円形を呈し不揃いで、深さも35~59cmとやや幅がある。北側梁行西端、北から2列目、中央桁行西から3列目の柱穴に根石が残る。柱堀形内から五輪塔火輪部1点、土師器鍋、天目茶碗などが出土している。

S B46 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行8.9m、梁行4.8m、柱間は桁行1.9m+2.5m+2.1m+2.4mの不等間で、梁行は2.4mの等間である。柱堀形は径35~60cmの楕円形及び不整形で、深さは26~61cmである。柱堀形から土師器片が少量しているのみである。

S B47 東西棟。5×2間の総柱建物である。桁行10.4m、梁行5.3m、柱間は桁行1.8m+2.0m+2.1m+2.3m×2、梁行2.7m+2.6mの不等間である。

柱堀形は径30~55cmの円形・楕円形で、深さは33~60cmである。北側桁行東から3列目、中央桁行西から2・3列目の柱穴には1個及び数個の根石が残っている。柱堀形内から土師器皿、常滑甕片が若干出土している。

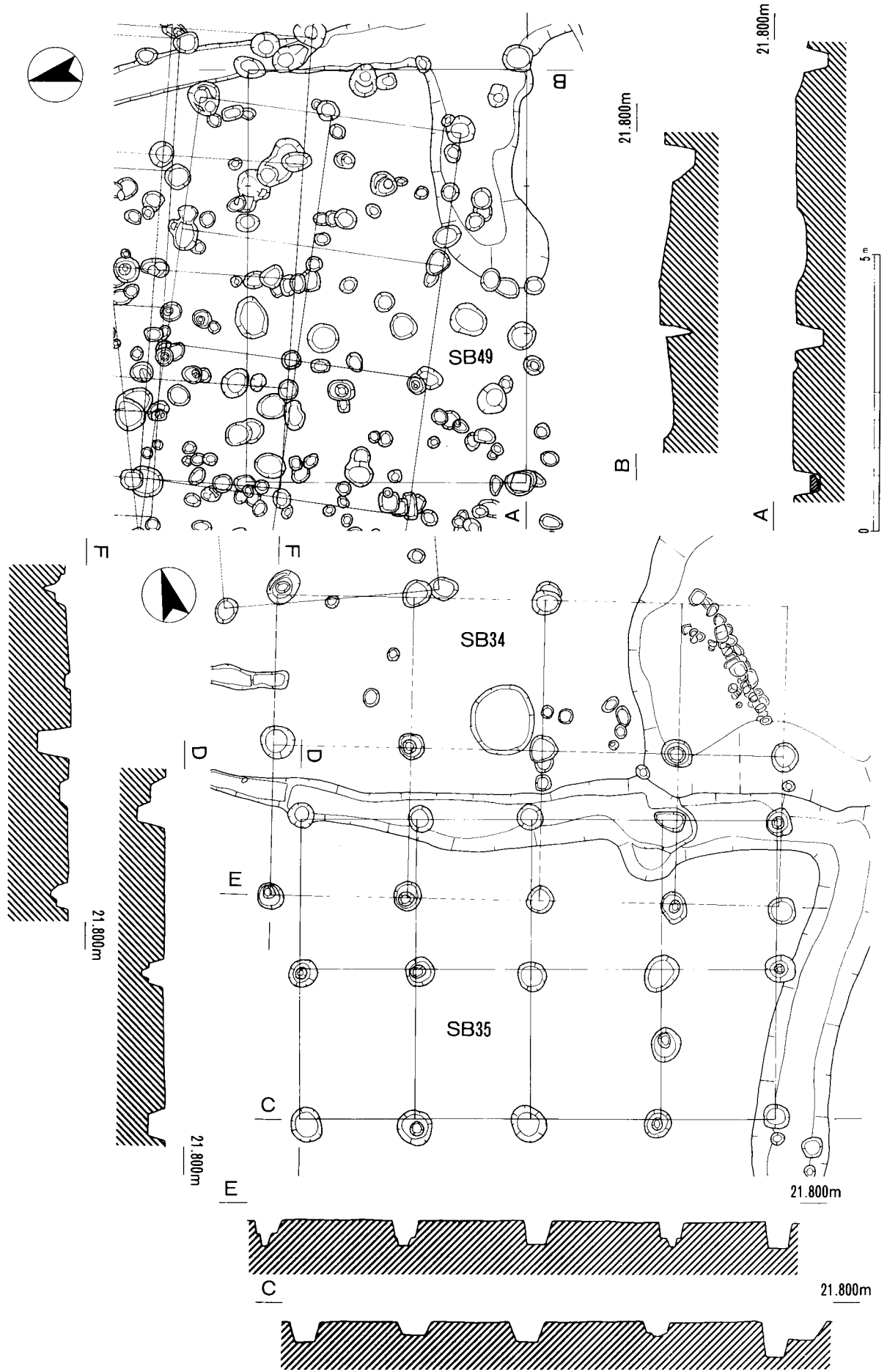
S B49 東西棟。3×2間で、桁行7.5m、梁行5.1m、柱間は桁行2.7m×2.1m、梁行は3.0m+2.1mの不等間である。柱堀形は径30~75cmの円形及び楕円形で不揃いで、深さも30~76cmとやや幅がある。南側桁行東から2列目の柱穴が検出できなかったが、南西隅の柱穴には五輪塔火輪部が逆に置かれ、根石の役割を果たしていた。柱堀形からの出土遺物は前記の五輪塔火輪部の他に、少量の土師器鍋片がある。

以上、A-2地区の掘立柱建物は、その他の掘立柱建物も含め、柱堀形や柱間寸法などにそれぞれかなり差異が見られる。また場所によって柱穴が検出されないものもあった。

番号	規 模				棟 方 向	柱間寸法 (m)		備 考
	間数	桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (㎡)		桁 行	梁 行	
15	4×1以上	5.6	(1.8以上)	—	(東西棟)・E12°S	1.8+2.0+1.8	1.8	柱痕跡2ヶ所
16	4×2以上	8.2	(3.1以上)	—	()・E15°S	1.9+2.1×3	3.1	
17	4×1以上	6.3	2.1	13.23	東西棟・E5°S	1.8+2.4+2.1	2.1	
18	2×1以上	(2.7以上)	3.6	—	(東西棟)・N12°E	2.7	1.8	柱痕跡1ヶ所
19	2×1以上	(2.1以上)	3.8	—	()・N7°E	2.1	1.9	総柱建物
20	4×2	9.2	5.0	46.00	東西棟・E13°S	2.1×2+2.5×2	2.5	
21	3×2	6.0	3.8	22.80)・E5°S	2.4+1.8×2	1.8+2.0	柱穴1ヶ所未検出
22	4×2	7.6	3.9	29.64	南北棟・N11°E	東側2.0+1.8×2+2.0 西側2.0+1.8+2.0+1.8	1.8+2.1	
24	3×2	6.0	3.7	22.20)・N11°E	2.1+1.8+2.1	1.8+1.9	柱1ヶ所未検出 総柱建物
25	3×1	5.6	2.1	11.72	東西棟・E12°S	2.0+1.8×2	2.1	
26	4×2	9.3	5.1	47.43)・E12°S	2.4+2.1+2.4×2	2.4+2.7	
27	3×2	6.3	4.6	28.98)・E10°S	2.2×2+2.1	2.2+2.4	総柱建物
34	4×2	9.3	5.4	50.22)・E17°S	2.5+2.4+2.5+1.9	2.7)
35	4×2	8.7	5.4	46.98)・E16°S	2.1×2+2.4+2.1	2.7)
40	4×2	9.5	5.8	55.10)・E15°S	2.1+2.2+2.7+2.5	2.9)
41	3×2	7.6	5.7	43.32)・E16°S	北側2.7+2.4+2.5 南側2.4+2.7+2.5	3.0+2.7	
42	2以上×2	(4.0以上)	4.3	—)・E22°S	1.9+2.1	2.2+2.1	
43	3×2	6.0	3.3	19.8)・E15°S	2.7+1.8+1.5	1.6+1.7	柱穴2ヶ所未検出
44	4×2	8.8	4.9	43.12)・E16°S	1.9+2.0+2.5+2.4	2.2+2.7	総柱建物
45	5×2	10.4	5.4	56.16)・E6°S	1.8×3+2.7+2.3	2.7)
46	4×2	8.9	4.8	42.72)・E21°S	1.9+2.5+2.1+2.4	2.4)
47	5×2	10.4	5.3	55.12)・E17°S	1.8+2.0+2.1+2.3×2	2.7+2.6)
48	3以上×2	5.4以上	4.6	—)・E29°S	1.8	2.4+2.2	柱穴2ヶ所未検出
49	3×2	7.5	5.1	38.25)・E12°S	2.7×2+2.1	3.0+2.1	
53	3×2	4.9	3.8	18.62	南北棟・N9°E	1.9×2+1.1	1.9	柱穴1ヶ所未検出 南側に廂

第4表 A-2地区 掘立柱建物一覧表 () 推定 (—) 不明





第9図 S B34・35・49 実測図 (1:100)

B. 土 坑

S K 30 長径6.0m以上、短径3.4mの長円形を呈し、深さは20～30cmである。S K 33との新旧関係は不明である。土師器皿の他に浅鉢・甕など多くの常滑製品が出土している。

S K 31 長径4.0m、短径2.3mの楕円形を呈し、深さは16～50cmである。出土遺物には土師器鍋片、常滑鉢などが少量ある。

S K 33 一辺4.2～6.0mのやや中央の膨んだ長方形を呈し、深さは20～50cmである。土坑内に南北に並ぶ石列があるが、その性格は不明である。出土遺物は土師器鍋片、天目茶碗片が少量あるのみである。

S K 39 長軸9.4m、短軸3.4mの不整な形を呈し、深さは30～50cmである。複数の土坑が重複していると考えられる。出土遺物は若干の常滑甕がある。

S K 51 発掘区南壁で切られるために全体規模は不明であるが、長辺7.0m以上、短辺3.3mの不整な長方形を呈し、深さは5～30cmである。土師器鍋、常滑鉢、染付小皿などが比較的多く出土している。

S K 55 長径4.5m以上、短径4.4mの楕円形を呈し、深さは15～35cmである。天目茶碗、常滑片口鉢・甕片などが出土している。

C. 溝

S D 38 発掘区中央やや東をほぼ南北に走る溝である。幅30～70cmで、深さは平均15cmと浅い。山茶碗・山茶碗小皿、土師器鍋片などが出土している。

S D 52 コの字状に走る溝で、幅0.2～1.5m、深さは15～40cmである。出土遺物には山茶碗片、土師器鍋、灰釉鉢片などがある。

2. 江戸時代前期から中期の遺構

A. 土 坑

S K 29 いくつかの土坑が重複している土坑と考えられるが、切り合いが明瞭に確認されなかったので一つの不定形な土坑として扱った。深さは20～90cmと幅があり、南東隅が深い。北西隅に集石があるが、規則的なものは認められず、その性格は不明といわざるを得ない。土坑内からの出土遺物は多量で、中でも土師器羽釜はその量が多い。その他、瀬戸・美濃系の片口鉢、同じく鉄釉片口鉢、瓦質火鉢片などがある。

S K 32 一辺1.3～1.4mの隅丸方形を呈し、深さは6cmと浅い。美濃系太白茶碗片や染付碗などが出土している。

S K 54 長辺10.0m、短辺3.3mの不整な長方形を呈し、深さは5～60cmと幅がある。S K 29との切り合い関係は不明である。出土遺物は土師器羽釜、瀬戸灰釉皿、京風焼の陶器片などがある。

S K 59 長辺2.0m、短辺1.0mのやや丸味をもつ長方形を呈し、深さは16cmである。土坑内には投げ込まれたような少量の石がある。土師器片が少量ではあるが出土している。

B. 溝

S D 58 発掘区南西隅で検出された溝である。幅0.7～1.5m、深さは15～50cmでほぼ南北に走る。東壁の一部に石列がある。山茶碗小皿、天目茶碗などが出土している。

C. 井 戸

S E 23 径1.7～2.0mの楕円形で、深さ1.9mの堀形をもつ素掘り井戸である。出土遺物は志野反皿・丸皿、瀬戸輪髡皿、風炉、天目茶碗などがあるが、大形獣骨片、具類なども多量に出土した。その他に石臼も出土している。

S E 28 径1.8～1.9mの楕円形で、深さは2.2mの堀形をもつ素掘り井戸である。出土遺物は常滑浅鉢の他に、下駄一足、漆塗椀3個体分の木製品、石臼などがある。

S E 36 径3.0～3.3mの楕円形で、深さは2.4mの堀形をもつ素掘り井戸である。瀬戸鉄絵皿・鉄釉小壺などが出土している。

S E 37 径1.2～1.4mの楕円形で、深さは1.6mの堀形をもつ素掘り井戸である。瀬戸・美濃系鉄釉水滴・壺片、常滑甕片などがある。

S E 50 径1.4～1.5mの楕円形、深さは7.0mで、井戸の中央片側で膨らむ堀形をもつ素掘り井戸である。出土遺物は常滑片口鉢、瀬戸鉄絵皿、肥前系陶磁器碗（大明年製銘）などがある。

S E 56 径1.3～1.5mの楕円形で、深さは1.3mの堀形をもつ素掘り井戸である。常滑甕片が多く、また瓦器火鉢片などが出土した。しかし、崩落の危険もあり、S E 50を除く他の井戸は完掘出来なかった。

A-3 地区

A-3 地区で検出された主な遺構は、平安時代末期から鎌倉時代前期に属する土坑6基、溝2条、室町時代末期から江戸時代初頭に属する掘立柱建物24棟、土坑16基、溝10条、井戸3基、江戸時代前期から中期の土坑5基、溝1条、井戸4基などである。さらに発掘区の東から南にかけて時期は決定しがたいが、土塁が取り巻いている。

遺構検出はA-1・2地区と同じように耕作土直下にある淡褐色土上面で行った。

1. 平安時代末期から鎌倉時代前期の遺構

A. 土坑

S K 65 長径6.5m、短径5.0mの不整形を呈し、深さは20~3cmである。山茶碗が多量に出土している。

S K 67 長辺3.3m、短辺1.5mの不整な長方形を呈し、深さは56~76cm。北辺に階段状のものがある。山茶碗、土師器鍋が少量出土している。

S K 106 長径2.9m、短径2.1mの楕円形を呈し、深さは55cmである。土坑内に集石があるが、その性格は不明である。出土遺物には山茶碗、瓦器碗片が少量ある。

S K 111 径1.4~1.5mのほぼ円形で、深さは1.41mである。井戸を掘りかけて中断したものの可能性もある。山茶碗、土師器鍋片などが出土している。

S K 115 径0.9~1.0mのやや楕円形を呈し、深さは16cmである。山茶碗片が少量出土した。

S K 135 長辺4.0m、短辺3.7mの隅丸方形を呈し、深さは23~36cmである。出土遺物は山茶碗、瓦器碗片、青磁片、渥美鉢片などがある。

B. 溝

S D 62 発掘区北東隅で検出された溝で、幅1.8m、深さ23~33cmで東西に走る。土師器鍋片の他、山茶碗が多量に出土している。

S D 95 東西に走り、S D 96と重なる溝である。幅60~90cmで、深さは10~15cmと浅い。山茶碗片が少量出土した。

2. 室町時代末期から江戸時代初頭の遺構

A. 掘立柱建物

S B 64 東西棟。1間以上×1間で、桁行2.2m以上、梁行2.0mである。柱掘形は径30~50cmの楕円形、深さは24~45cmであり、掘形内からは土師器片が若干出土したのみである。S B 64は、S D 60・61の中間に位置することから溝の間に設けられた門的な機能をもつ建物の可能性がある。

S B 69 東西棟。4×2間で、桁行9.0m、梁行4.8m、柱間は桁行2.2m+2.5m+2.2m+2.1m、梁行は東側が2.1m+2.7m、西側が2.7m+2.1mの不等間である。柱掘形は径35~55cm、深さは30~40cmと比較的揃っており、柱痕跡が3ヶ所に残っている。

S B 70 東西棟。3×2間で、桁行5.9、梁行4.1m、柱間は桁行2.0m+1.8m+2.1m、梁行は2.2m+1.9mのそれぞれ不等間である。柱掘形は径25~45cmの円形・楕円形で深さは15~55cmとやや幅がある。北側桁行北端と西端に根石が残る。柱掘形内から土師器片が少量出土している。

S B 76 東西棟。3×2間で、桁行5.3m、梁行3.9m、柱間は桁行1.8m+2.0m+1.5m、梁行2.1m+1.8mの不等間である。柱掘形は径25~50cmのほぼ円形で深さは15~53cmとやや幅がある。

S B 79 東西棟。4×2間の総柱建物である。桁行8.8m、梁行4.8m、柱間は桁行2.2m×2+2.4m+2.0mの不等間、梁行は2.4mの等間である。柱掘形は径25~55cmの円形や楕円形などであるものの全体に揃っているが、深さは17~48cmとやや幅がある。中央柱列東から2・3列目、南側桁行東から2列目の柱穴には柱痕跡が残る。柱掘形内から陶器片が若干出土している。

S B 81 4×2間で、桁行7.9m、梁行3.6m、柱間は桁行2.1m+1.8m+2.0m+2.1mと不等間、梁行は1.8mの等間である。柱掘形は径25~55cmの円形・楕円形と不揃いであり、深さは22~44cmである。東側に廂をもつ。柱掘形内から陶器皿片が出土している。

S B 92 東西棟。3×間で、桁行5.7m、梁行3.7

m、柱間は桁行1.9m×3の等間、梁行は1.8m+1.9mの不等間である。柱掘形は20~30cmの円形・楕円形、深さは14~32cmである。東側梁行中央の柱穴が検出出来なかった。

S B98 南北棟。4×1間で、桁行8.4m、梁行2.2m、柱間は桁行2.1mの等間である。柱掘形は25~45cmの円形・楕円形、深さは10~25cmである。

S B101 東西棟。3×2間の総柱建物である。桁行5.7m、梁行4.9m柱間は桁行2.3m+2.0m+1.4m、梁行2.4m+2.5mの不等間である。柱掘形は30~50cmの円形・楕円形などであるが全体にバランスが取れており、深さは30~53cmとやや幅がある。南西隅の柱穴に柱痕跡が残る。柱掘形内から陶器皿片などが少量出土している。

S B102 東西棟。5×2間で、桁行10.5m、梁行4.0m、柱間は桁行2.1m、梁行は2.0mのそれぞれ

等間である。柱掘形は径20~40cmのほぼ円形に近く、深さは10~29cmである。北側桁行西端と3列目、南東隅の柱穴に根石が、2ヶ所に柱痕跡が残る。西側に廂がつくと考えられる。

S B119 南北棟。4×2間の総柱建物である。桁行8.6m、梁行5.8m、柱間は桁行2.3m+2.1m×3、梁行は2.9m+2.7mの不等間である。柱掘形は径15~60cmの円形など不揃いで、深さも16~53cmと幅がある。西側北寄りに、2.3m+2.1mの2間分、2.1mの1間分の張り出し部分がある。柱掘形内から土師器鍋片が少量出土している。

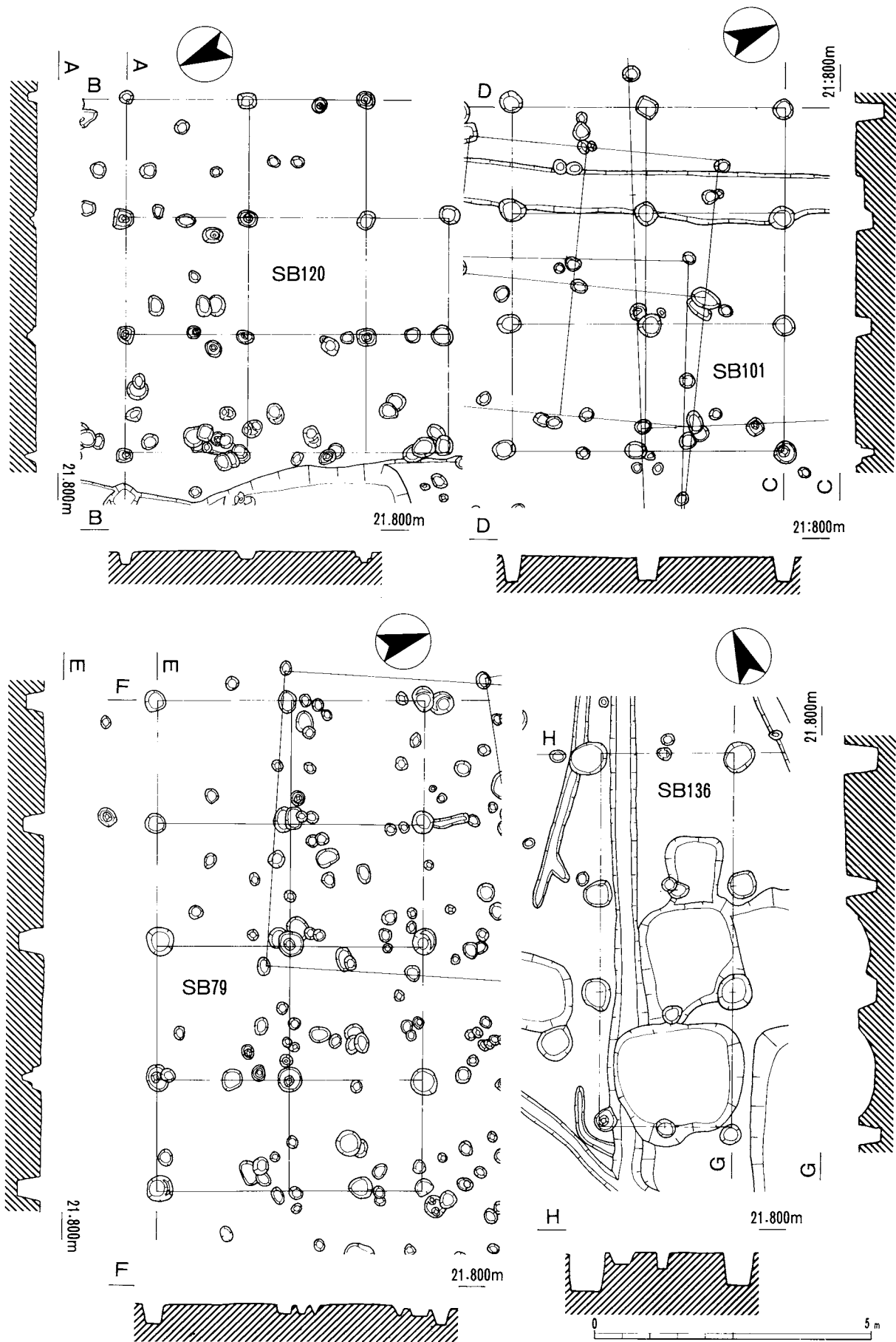
S B120 東西棟。3×2間の総柱建物である。桁行6.3m、梁行4.3m、柱間は桁行2.1mの等間で、梁行は2.2m+2.1mと不等間である。柱掘形は径20~40cmの円形、一辺25~35cmのやや不整な方形など不揃いで、深さも15~40cmと幅がある。南側西寄り

番号	規 模				棟 方 向	柱間寸法 (m)		備 考
	間数	桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (㎡)		桁 行	梁 行	
64	1以上×1	2.2以上	2.0	—	東西棟・E23°S	2.2	2.0	
68	3×2	5.8	5.4	31.32	〃・E18°S	1.9+1.8+2.1	2.7	
69	4×2	9.0	4.8	43.2	〃・E9°S	2.2+2.5+2.2+2.0	東側2.1+2.7 西側2.7+2.1	
70	3×2	5.9	4.1	24.19	〃・E17°S	2.0+1.8+2.1	2.2+1.9	
76	3×2	5.3	3.9	20.67	〃・E7°S	1.8+2.0+1.5	2.1+1.8	
77	1以上×2	1.9以上	4.0	—	(南北棟)・N15°E	1.9	2.0	
78	3×2	5.3	4.8	25.44	東西棟・E19°S	1.8+1.5+2.0	1.9+2.7	柱痕跡2ヶ所 柱穴1ヶ所未検出
79	4×2	8.8	4.8	24.24	〃・E15°S	2.2×2+2.4+2.0	2.4	総柱建物
81	4×2	7.9	3.6	28.44	〃・E17°S	2.0+1.8+2.0+2.1	1.8	東側に廂
82	4×2	7.5	4.8	36.00	〃・E20°S	1.8+2.1×2+1.5	2.4	
83	3×2	5.7	5.4	30.78	〃・E25°S	1.8×2+2.1	2.7	柱痕跡2ヶ所
84	3×3	4.8	4.6	22.08	南北棟・N18°E	1.5+1.8+1.5	1.6+1.5×2	柱痕跡1ヶ所 (総柱建物?)
92	3×2	5.7	3.7	21.09	東西棟・E13°S	1.9×3	1.8+1.9	
98	4×1	8.4	2.2	18.48	南北棟・N22°E	2.1	2.2	
99	4×2	8.3	4.4	36.52	東西棟・E23°S	2.0+2.1×3	2.2	
100	4×2	8.7	4.5	39.15	〃・E27°S	北側2.2+1.6+2.4+2.5 南側1.8+2.0+2.4+2.5	2.1+2.4	一部に東柱をもつ
101	3×2	5.7	4.9	27.93	〃・E22°S	2.3+2.0+1.4	2.4+2.5	総柱建物
102	5×2	10.5	4.0	42.00	〃・E20°S	2.1	2.0	西側に廂
103	4×2	8.4	4.2	35.28	南北棟・N30°E	2.2+2.0×2+2.2	2.2	柱痕跡2ヶ所、柱穴3ヶ所 未検出北側に廂
105	3×1以上	7.3	2.0以上	—	(南北棟)・N24°E	2.9+2.1+2.3	2.0	柱穴2ヶ所未検出、根石1ヶ所 東側に廂、柱痕跡1ヶ所
112	2以上×2	4.2以上	3.9	—	(東西棟)・E19°S	北側2.5 南側2.1×2	1.8+2.1	柱穴1ヶ所未検出 柱痕跡2ヶ所
119	4×2	8.6	5.8	68.36(総面積)	南北棟・N22°E	2.3+2.1×3	2.9+2.7	総柱建物
120	3×2	6.3	4.3	39.39(総面積)	東西棟・E23°S	2.1	2.2+2.1	〃
136	3×2	6.7	2.4	16.08	南北棟・N22°E	2.4+1.9+2.4	1.2	

第5表 A-3地区掘立柱建物一覧表 () : 推定 (—) : 不明



第10图 A-3地区遺構平面図(1:200) P5~8 柱根



第11図 S B79・101・120・136 実測図 (1:100)

に2.1m×2の2間分、1.5mの1間分の張り出し部分をもつ。西側梁行の南端の柱穴は検出できなかったが、7ヶ所に柱痕跡が、南西隅柱穴に柱根が残る。

S B136 南北棟。3×2間で、桁行6.7m、梁行2.4m、柱間は桁行2.4m+1.9m+2.4mの不等間、梁行は1.5mの等間である。柱掘形は径20~70cmの円形・楕円形、深さも31~64cmとやや幅があるが、主な柱穴は比較的その大きさはまとまっている。全体の形及び建物内の2ヶ所のピットを考えると、通常の建物ではなくS B64と同様に門的な機能をもつものとして考えたほうが適切ではあるまいか。柱掘形内から土師器鍋片が若干出土している。

B. 土 坑

S K66 長辺3.3m、短辺1.5mの不整な長方形を呈し、深さは40~65cmとやや深い。陶器片などが少量出土している。

S K71 長径1.2m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さは60cmとやや深い。土坑内に集石があるがその性格は不明である。出土遺物には天目茶碗片がある。

S K73 長辺4.8m、短辺3.4mの不整な長方形を呈し、深さは40~50cmである。土師器鍋・羽釜片などが出土している。

S K75 時期的にあまり差がないと考えられる複数の土坑が重複している不整な土坑で、最大幅13.8m、最小幅4.9m、深さ15~45cmの規模をもつ。土坑中央付近にA-2地区のS K33と類似した石列をもつが、その性格は不明といわざるを得ない。多量の土師器鍋と土師器羽釜、播鉢が出土している。

S K85 径1.0mのはほぼ円形を呈し、深さは15cmである。土師器鍋片などが少量出土している。

S K87 長辺5.0m、短辺3.0mの不整な菱形を呈し、深さは20~30cmである。土師器鍋片などが少量出土している。

S K88 長辺4.1m、短辺2.6mの隅丸長方形で、深さは10cmと浅い。土師器鍋片が若干出土したのみである。

S K97 発掘区西壁で切られるため全体規模は不明であるが、長辺9.3m、短辺3.2m以上の不整な長方形と推定される土坑で、深さ35~40cmである。多

量の土師器羽釜片が出土している。

S K107 長軸10.0m、短軸1.8mの不整な形を呈し、深さは45~50cmである。出土遺物は土師器鍋片が少量ある。

S K108 径0.8~1.4mの楕円形を呈し、深さは40cmである。播鉢片が少量出土している。

S K109 一辺3.4~3.5mの隅丸の方形を呈し、深さは75cmと深い。瀬戸鉄絵皿、常滑片口鉢などが出土している。

S K110 長径7.0m、短径3.0mの不整な長円形を呈し、深さ10~35cmである。土師器鍋・羽釜片の他に瀬戸・美濃系の鉄釉水滴、灰釉折縁皿などが出土している。

S K114 長辺3.1m、短辺2.7mの長方形を呈し、深さは35~40cmである。土師器鍋片が若干出土している。

S K122 長辺3.8m、短辺2.8mの丸味をもった長方形を呈し、深さは50~93cmとやや深い。2基の土坑が重複しているのかも知れない。

S K130 長辺7.3m、短辺1.9mの不整な長方形を呈し、深さは40~50mである。土師器鍋片の他に、肥前唐津皮鯨手皿などが出土している。

S K131 長軸4.0m、短軸1.2mの長方形を呈し、深さは15~30cmである。山茶碗小皿、播鉢片などが出土している。

C. 溝

S D60 発掘区北東隅で検出された溝で、幅2.1~3.0m、深さは50~60cmで東西に走る。土師器鍋片の他に五輪塔火輪部が出土している。

S D61 S D61と平行して東西に走る溝で、幅平均2.2m、深さ50~65cmである。出土遺物には土師器鍋片、天目茶碗片、瀬戸鉄絵皿などがある。S D60・61は同時期に平行していた溝と考えられる。

S D80 幅0.9~2.1m、深さは10~30cmと比較的浅く、コの字状に走る溝である。土師器鍋・羽釜片や常滑甕片が出土している。

S D90 幅20~40cm、深さ5~10cmで南北に走る溝である。途中で途切れているが、南のS D117とはつながるのではないかと考えられる。土師器羽釜・鍋片が少量ではあるが出土した。

S D91 幅20~70cmで、深さが5~20cmで南北に

走る溝で、SE89からくみ上げた水を流した溝の可能性が考えられる。

SD96 発掘区中央を南北に長く走る溝で、幅0.6～2.1m、深さ15～30cmである。出土遺物は多量の山茶碗が出土しているが、その他にも播鉢片や近世初め頃の陶器片なども出土しているなど年代的に幅がある。しかし、溝自体は中世末期頃までには埋没していたものと考えられる。

SD117 南北に走る幅20～50cm、深さ5～25cmの溝である。土師器鍋片が少量出土している。

SD118 SD117 とは同時に存在したと考えられる溝で、幅20～40cm、深さは10～25cmである。常滑甕片が若干出土したのみである。

SD125 鍵手状に南北に走る溝で、幅0.3～2.3m、深さは10～20cmである。播鉢片の他に石臼などが出土している。

SD126 幅20～40cmで、深さ7～17cmの南北に走る溝である。SK115・116の北側で途切れて東西に走る溝とはつながり、鍵手状の溝になると考えられる。播鉢片が少量出土している。

D. 井戸

SE86 径1.4mの不整な楕円形で、深さ1.8mの掘形をもつ素掘り井戸である。出土遺物には多量の土師器羽釜や常滑甕片の他に、瓦器花瓶片などが出土している。

SE89 径1.9mのほぼ円形で、深さ約3.0m、東側2.2～2.3mの所で膨らむ掘形をもつ素掘り井戸である。土師器鍋や天目茶碗片などに混って獣骨が出土している。

SE94 掘形は、上部は径4.0mの不整な円形で、深さ2.0mの所で段をもち、下部はさらに一辺1.2～1.5mの方形で深さ約3.0mである。下部の方形部分はかつて木製の井戸枠があったと考えられる。多量の土師器鍋・羽釜が出土し、また石臼も出土している。これらの井戸も崩落の危険などから完掘に至っていない。

3. 江戸時代前期から中期の遺構

A. 土坑

SK124 長径4.3m、短径2.2mの長円形を呈し、深さは85～95cmと深い。近世陶器片が若干出土して

いる。

SK127 長辺3.9m、短辺2.3mの不整な方形を呈し、深さは50cmである。近世陶器片が少量ながら出土している。

SK128 長径3.2m、短径2.9mのほぼ円形を呈し、深さは25～50cmである。

SK129 深さ45～50cmであるが、SK133と切り合うため全体規模は不明である。志野皿、常滑片口鉢・播鉢片などが出土している。

SK133 長辺10.3m、短辺4.5mの不整な長方形を呈し、深さは60～70cmである。SK129と切り合っていると考えられる。

B. 溝

SD63 幅0.4～1.3m、深さ10～30cmで東西に走る溝である。A-2地区のSD58とはつながるものと考えられる。土師器片が少量出土している。

C. 井戸

SE72 径0.9～1.6mの楕円形で、深さ1.5mの掘形をもつ素掘り井戸である。播鉢片などが出土している。

SE74 径1.1～1.3mの楕円形を呈し、深さは60cmと浅い。井戸として掘り始めたが途中で断念したものである。獣骨が数点出土している。

SE113 径1.4mのほぼ円形で、深さは1.0mの掘形をもつ素掘り井戸である。出土遺物は多く、特に土師器鍋片が多い。その他に瀬戸鉄絵皿、瀬戸・美濃系鉄釉香炉、徳利片などがある。

SE123 径1.6～1.8mの不整な円形で、深さ1.5mの掘形をもつ素掘り井戸である。常滑浅鉢片が出土している。しかし、これらの井戸も崩落等の危険等などにより完掘されるに至っていない。

4. その他、時期不明の遺構

SK93 径1.6mの楕円形を呈し、深さは16cmである。

SK116 径1.1mのほぼ円形を呈し、深さは20cm程度である。土坑内に密度の高い集石がある。かなりまとまりのある集石であるので、中世墓の可能性も考えられる。

SK121 長径1.3m、短径80cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。

B-1・2地区、C地区

1. B-1・2地区

B-1・2地区は、久居藩陣屋北西の万町から戸木村に通じる「奈良街道」の所在を確認するために設けられた調査区である。

奈良街道とは、参宮街道の月本（現、三雲町中林）から分岐し、牧～久居～羽野を経て三軒茶屋（現、久居市稲葉町）で伊賀街道（津城下～上野城下）に合流し、上野からは島ヶ原を経て奈良へ通じる街道の事である。

調査の結果、奈良街道の跡は確認されなかったが、主な遺構として、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけてに属する大溝が各1条ずつ検出された。

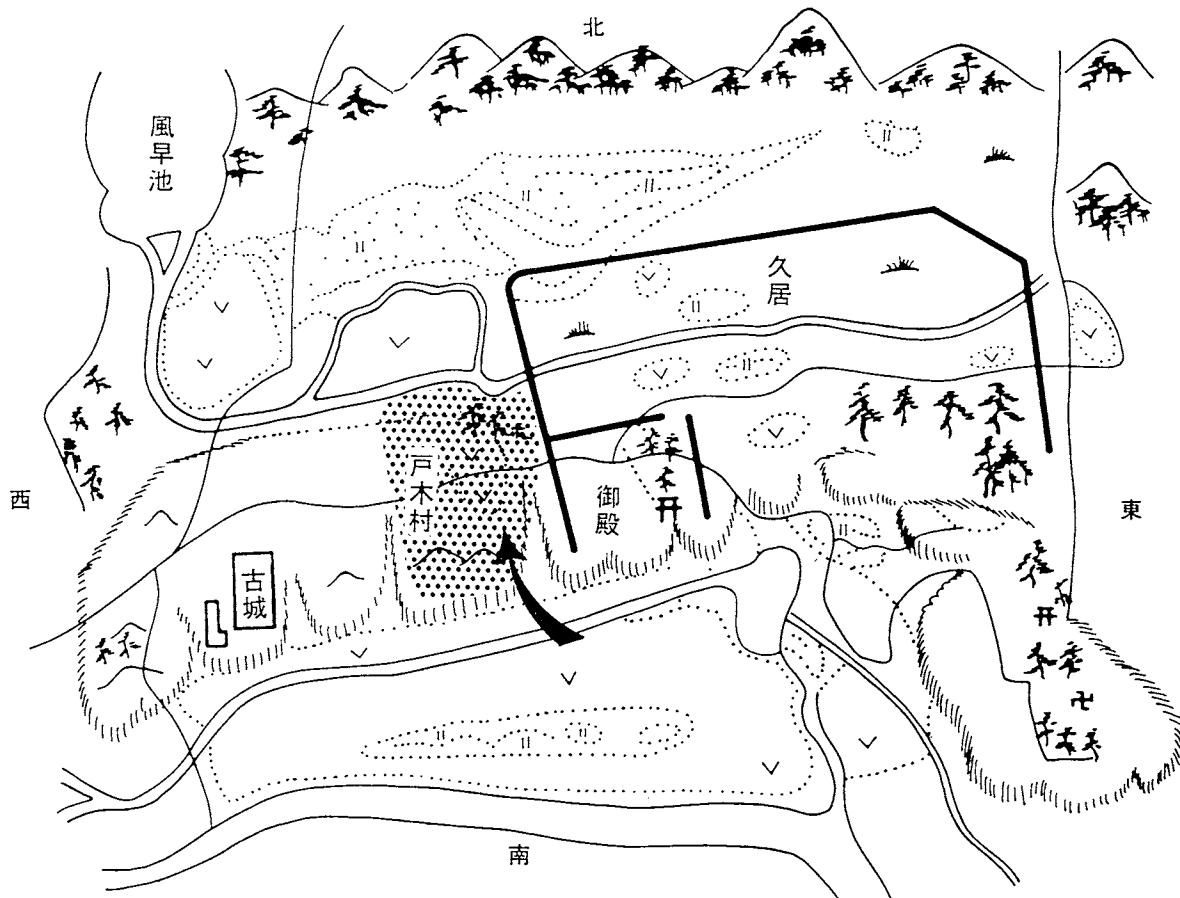
SD137・138 幅1.5～2.5m、深さ0.6～1.5mで

南北に走る溝である。溝は農道を越えてA-1地区にのびているものと考えられる。そして、北に向かって幅が広くなり、深くなる。出土遺物には、山茶碗が多量に出土し、若干の土師器鍋片もある。

2. C地区

C地区は、昭和36年頃の耕地整理時に付近から五輪塔が数百個出土した事実があり、そしてまた、「獄門田」という小字も残っていることなどから、中・近世墓が存在する可能性もあるので調査を行った地区である。

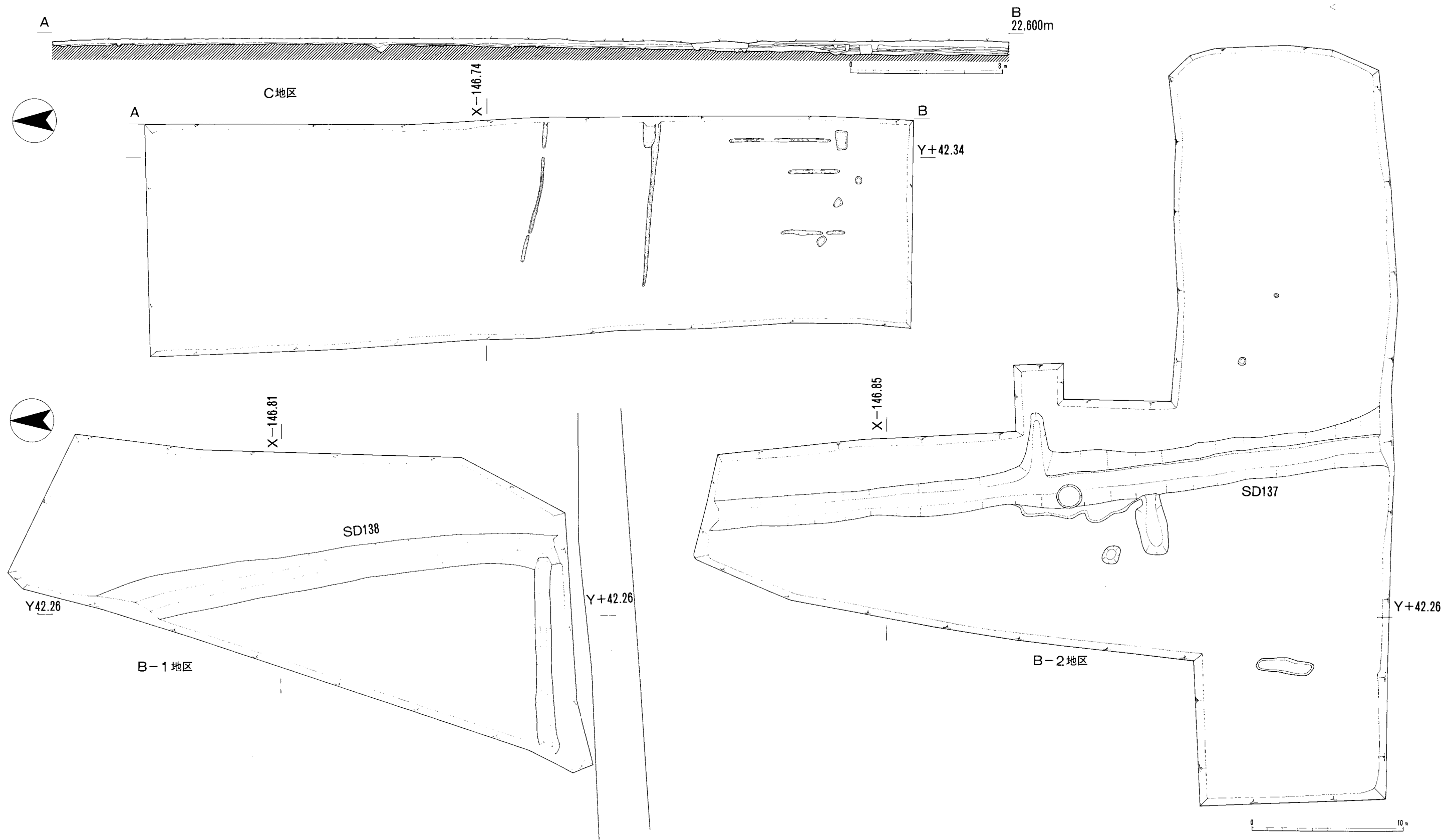
調査の結果、調査区の南半分は幾層にも整地が行われたらしい地層が確認された他は、時期不明の耕作溝らしい溝が検出されたのみであった。



眞川市左衛門御自参の絵図（藤堂子爵家蔵）
〔『藤影記』より模写〕

※ 上図中央部の「御殿」とは藤堂家の御屋敷、太線枠内が武家屋敷群である。
左下部の「古城」とは北畠支族の戸木氏城のことである。

第12図 戸木遺跡周辺古地図



第13图 B-1·2地区、C地区遺構平面図(1:250) C地区土層断面図(1:200)

4. 結 語

戸木遺跡は、その調査面積が約12,000㎡に及ぶにもかかわらず、B-1・2地区、C地区を除き検出された遺構の密度は高いものがある。中でも掘立柱建物が圧倒的に多く、また井戸が多いのも特徴の一つであろう。

戸木遺跡が位置する中位段丘面は雲出川によって形成された低位沖積地を望む生活を営むには比較的良好な場所といえる。現にこの中位段丘面の崖に沿う地域は、古代からの遺跡も多く分布しているところである。従って当遺跡からは古墳時代の須恵器なども出土している。しかし、段丘岸上が生活の中心であったであろうが、低位沖積地の微高地にも弥生時代から断続的ではあるが中世までの遺構が検出された長持元屋敷遺跡^①もあり、生活の場として、生活の糧を得る場所として、雲出川によって形成されたこの低地沖積地も見逃す訳にもいかないであろう。

さて、戸木遺跡で検出された遺構及び遺物から見ると、大きく平安時代末期から鎌倉時代初頭と、室町時代末期から江戸時代初頭及び前期から中期に生活の場があったと想定出来る。平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけての遺構は、A-3地区で溝や土坑などが検出されているのみで、建物跡は確認されなかったが、調査区外に建物群が存在する可能性もあろう。戸木という地名は「古事記」^② 応神天皇条に「幣岐君」の記載があり、「新撰姓氏録」^③にも「日置氏」の名が見え、さらに、「和名抄」^④にも一志郡の日置の記載が見られる。戸木を表す文字に「日置・幣岐・戸岐・」などがあることから、古代には戸木氏がこの戸木を中心とした地域に蟠居していたと考えられる。しかし、当時の中心は現久居市羽野町に古墳群が集中することなどから、当遺跡よりは西寄りにあったのではあるまいか。そしてまた生活の広がりとしては、平安時代に「日置荘」^⑤の存在も見られるようになり、その範囲はさらに拡大したと考えられ、戸木遺跡もその一部と想定されうる。従って検出された遺構は、当時の「日置荘」に属する集落の一部の可能性が考えられるのである。

室町時代末期から江戸時代初頭にかけての遺構は、

その大部分が掘立柱建物であり、49棟を数える。掘立柱建物については、中世以降その規模・規格性などに地域差や、またそれぞれに幅があることもあり、間数・柱間寸法、束柱の有無などに差異が見られる。しかし、主屋的な建物については、それぞれに若干の変化や差はあるにしても全体的にバランスが取れている。

掘立柱建物については、その方向性から6つのグループに別けることが出来る。

- ① Aグループ S B17・19・21・45・53 (A-2地区)
S B69・76 (A-3地区)
- ② Bグループ S B15・18・20・22・24・25・26・27・49 (A-2地区)
S B92 (A-3地区)
- ③ Cグループ S B16・34・35・40・41・43・44・47 (A-2地区)
S B68・70・77・79・81・84 (A-3地区)
- ④ Dグループ S B46 (A-2地区)
S B78・82・102・112 (A-3地区)
- ⑤ Eグループ S B42 (A-2地区)
S B64・83・98・99・101・105・119・120・136 (A-3地区)
- ⑥ Fグループ S B48 (A-2地区)
S B100・103 (A-3地区)

以上がそれぞれのグループである。

中世以降、この地域も含め南伊勢は伊勢国司家である北畠氏の支配するところとなり、特にこの地域一帯は一族の北畠顕俊が正平21年(1367)に木造城を築き木造氏を称した頃から、木造氏の支配するところとなった。木造氏はその後、歴代当主の一族を分家させ、文安4年(1447)に牧城を、明応5年(1496)には川方城を、さらに天文23年(1554)には戸木城^⑥をそれぞれ雲出川を南に望む段丘崖に築いている。中でも戸木城は木造氏の当主であった木造具政が出家・隠居した城である。織豊期には、木造

氏は織田氏の傘下に入り、北畠宗家と敵対するが、やがて宗家も滅び、豊臣氏が台頭するに及び、戸木城は豊臣方の蒲生秀郷との攻防の末、天正12年(1584)落城する。これらのことから、わかるように、戸木遺跡が位置する中位段丘面上には、集落としては、戸木城が滅ぶまでの約150年の間に各城に伴うものがその周囲に形成されていたと考えられる。したがって、戸木城の東約500mに位置する戸木遺跡は、戸木城を中心とする集落の一部と考えられ、これら多くの掘立柱建物は、戸木城が築かれてから、そして落城してしばらくの間、数十年間に集落を構成していた建物と考えられる。そしてこれらのグループは時期的に分けたものではないが、この数十年間にこれらのグループ別のような変遷をたどり、存続したと想定出来るのではあるまいか。

その他、この時期の遺構は土坑、溝、井戸などがあるが、溝は、SD1・2(A-2地区)、SD60・61(A-3地区)に関しては区画溝と考えられる。井戸については水脈まで深く完掘出来なかったものが多い。A-3地区では井戸と溝がつながっているものがあり、汲み上げた水を流した溝とも考えられる。また、SB64・136は門跡と考えており、時期不明ではあるが土塁を意識した門と考えられる。

近世に入り、この地域一帯は藤堂氏が津に入府し、

その支配を受け、やがて、藤堂高次の三男高通が分封され、野辺^{のみべ}の広野に寛文9年(1669)築城し、久居と改めたことにより久居藤堂藩の支配を受けた。そしてその陣屋は戸木遺跡の小谷を隔てた東隣に位置することとなったのである。江戸時代前期から中期の遺構はその大部分が久居藩成立以後組み入れられた戸木村のものであろうが、井戸が多く検出されているのに対し、建物が検出されていない。前時期に引き続いて集落としては存続したであろうから建物があるべきであるが、近世以降の住居の建築方法が徐々に農村部でも礎石をもつ建物に変化をしていることから、掘立柱建物のように柱穴が残らないことも考えられる。そして、近年耕地整理を受け現耕作土直下が遺構検出面であることなどから、それらが壊されていったことなども、残らなかった原因の一つであろう。

以上のことから戸木遺跡は、室町時代末期から江戸時代初頭、及び前期から中期に存続した集落の一部であるといえよう。しかし、中世末期以降の集落の発掘調査例は全国的に見てもその数は少なく、戸木遺跡にしても不明な点は数多い。したがって、不明な点は今後の全国に於ける同時期の調査例をも含め、解明していかねばならない課題を多く含んでいるといえるであろう。(河瀬信幸)

〔註〕

- ① 辻富美雄 『長持元屋敷遺跡調査報告』 久居市教育委員会 1980
- ② 『古事記』 岩波古典文学体系本 岩波書店 1958
- ③ 佐伯有清 『新撰姓氏録の研究・本文篇』 吉川弘文館 1962
- ④ 池辺彌 『和名類聚抄郡郷里賦名考證』 吉川弘文館 1981
- ⑤ 『久居市遺跡分布地図』 久居市教育委員会 1984

- ⑥ 『満濟准后日記』 続群書類従・補遺・続群書類従完成会 1985 など
- ⑦ 北畠・木造氏、その他久居市周辺の事は以下を参考にした。
○『久居市史』、『志郡史』、『伊勢国司記略』、『北畠氏の研究』など
- ⑧ 小王道明・吉利利男 『戸木城址発掘調査報告』 久居市教育委員会 1979



A-1・2・3地区全景

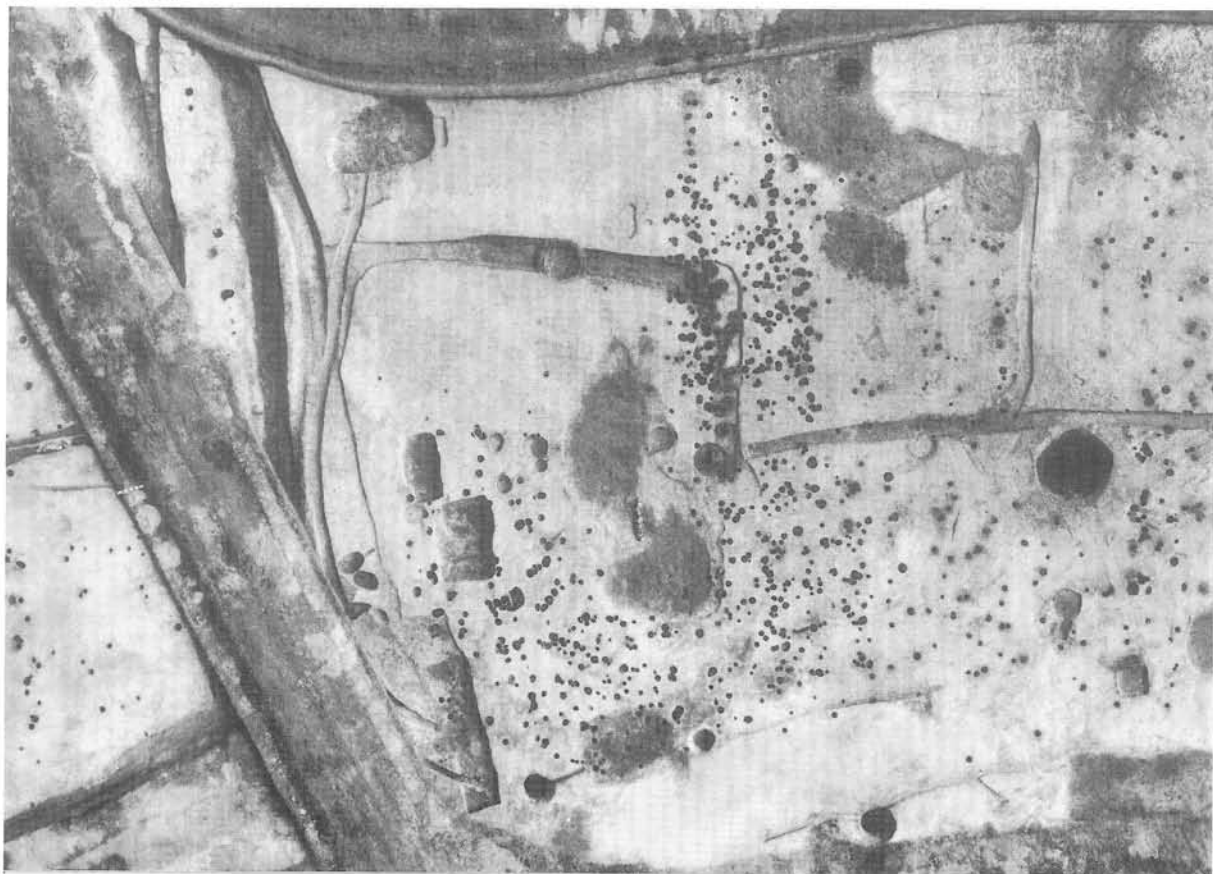


A-1地区全景

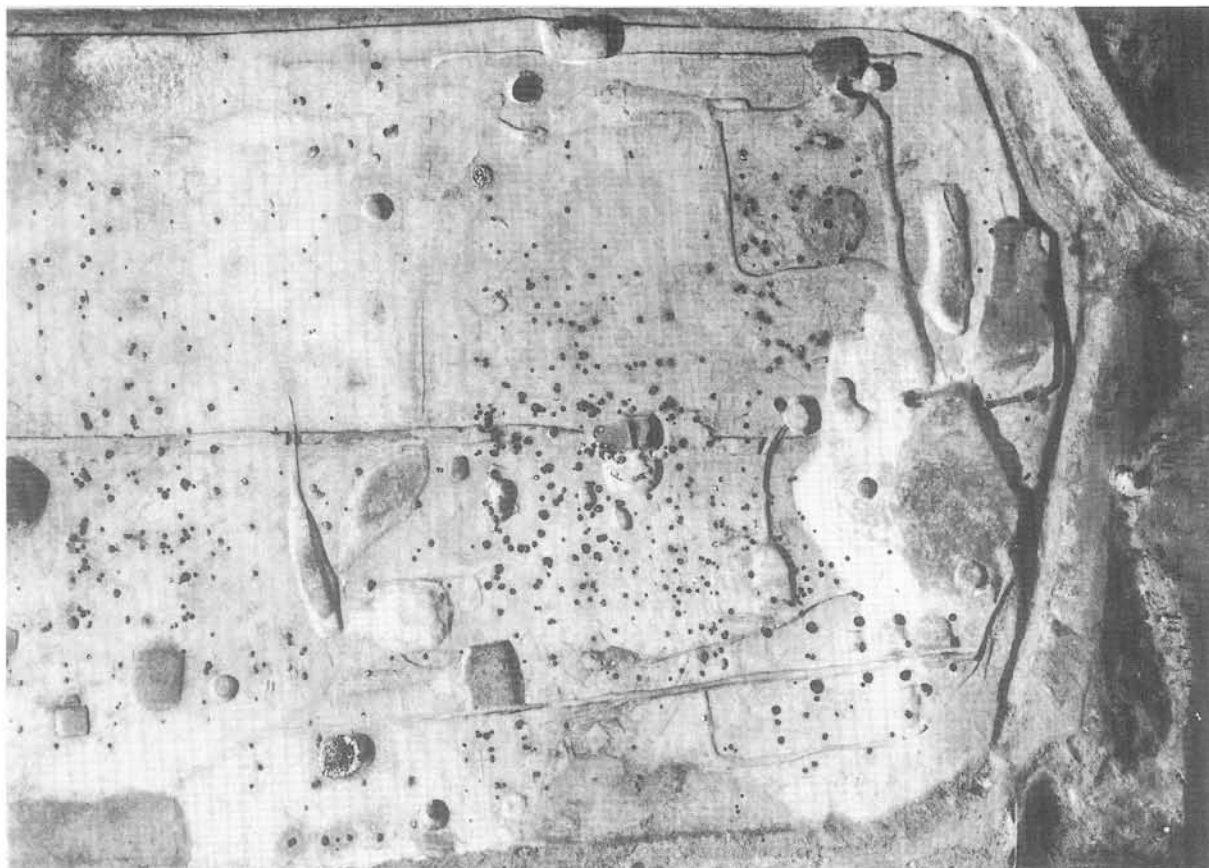
PL 2



A-2 地区全景



A-3 地区 (北半分)



A-3地区(南半分)



B-2地区SD137(北から)

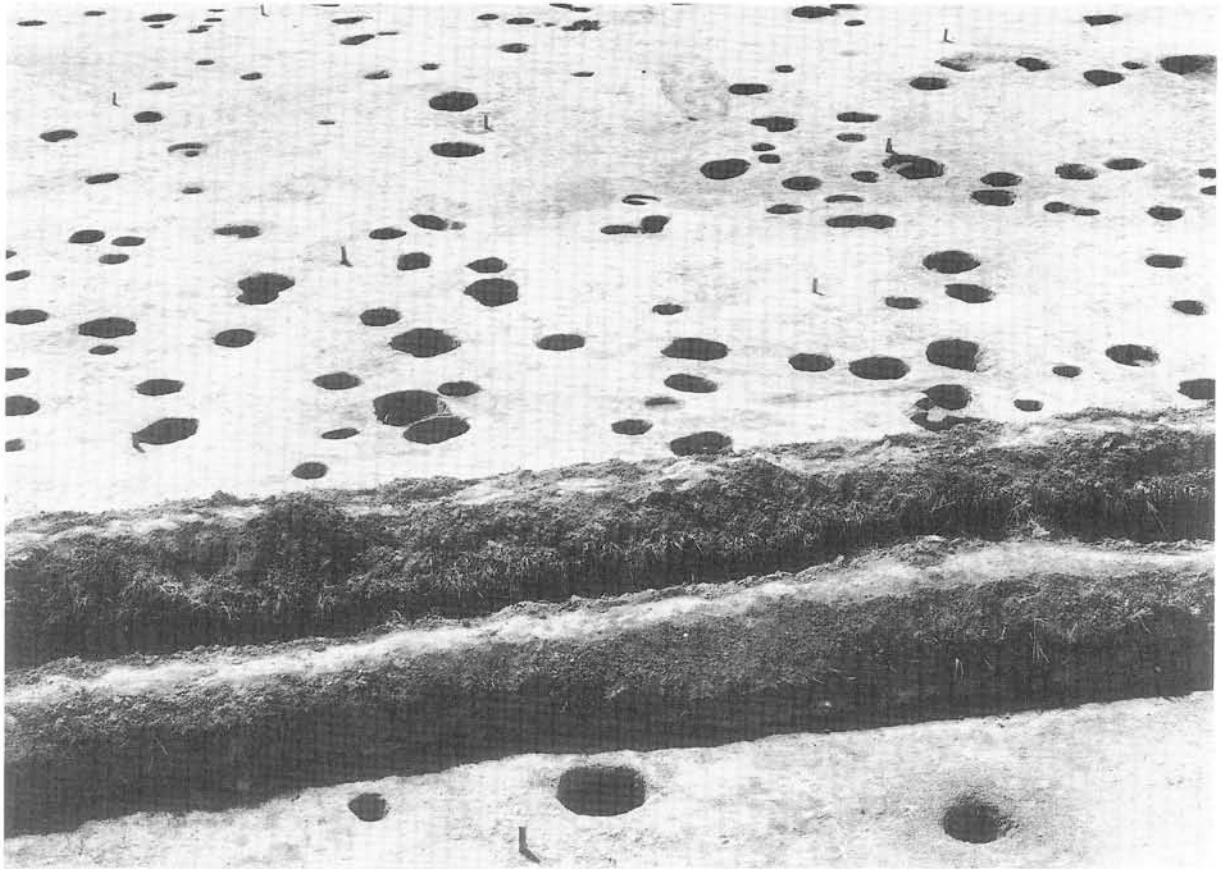
PL4



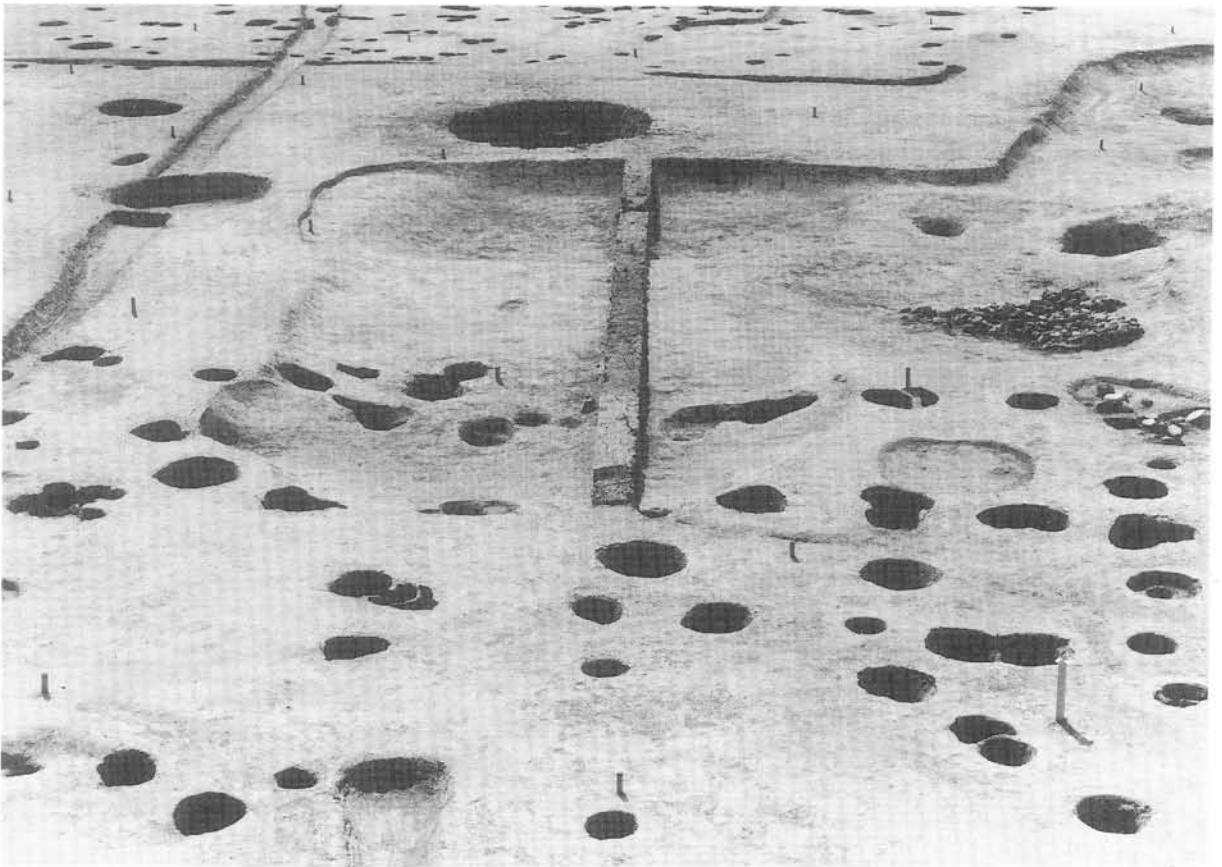
B-1 地区SD138 (南から)



A-2 地区全景 (北から)



S B15~19周辺 (北から)



S B24~26, S K29 (北から)

PL 6



S B34・35 (北から)



S B34・35, S K33, S D52 (東から)

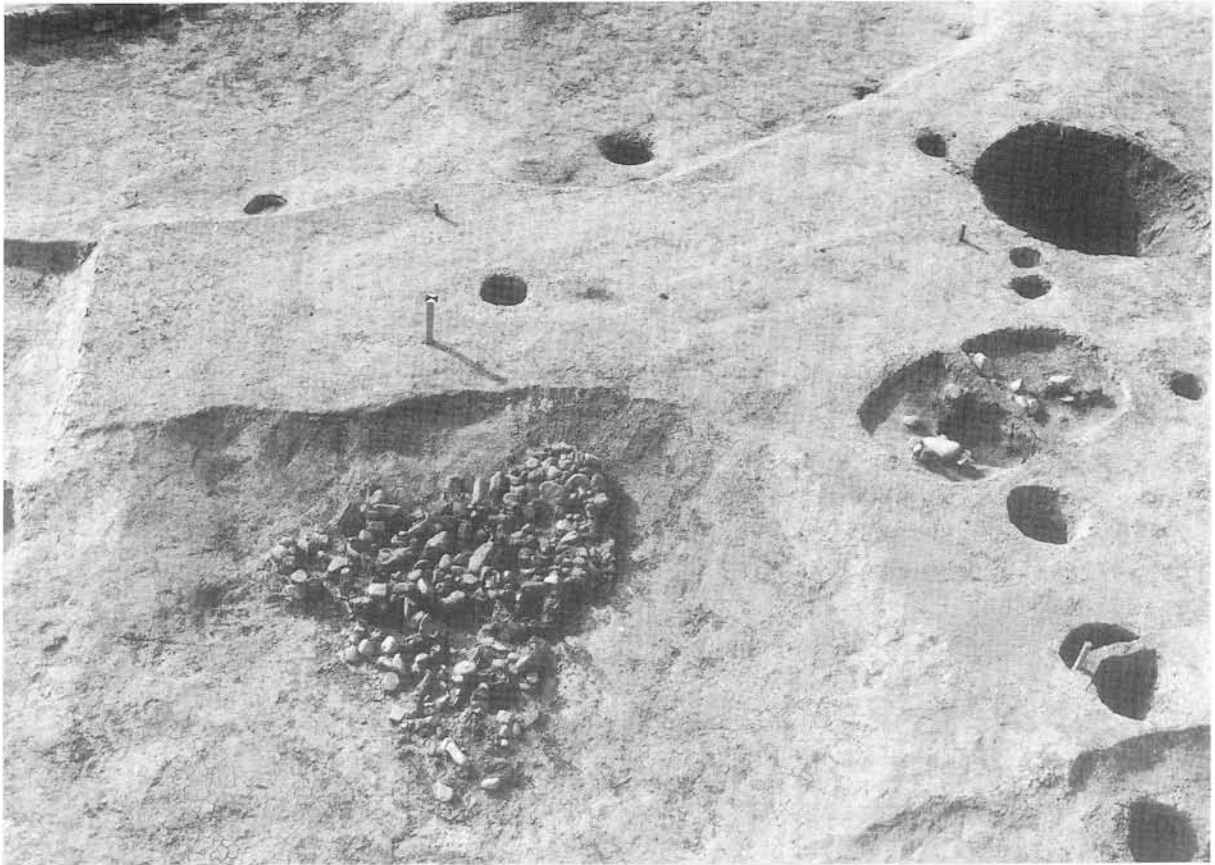


S E 36・37, S D 38, S B 43~49周辺 (北から)



S E 36 (北から)

PL 8



SK29 (集石), SK59, SE28 (東から)



A-3 地区全景 (北から)

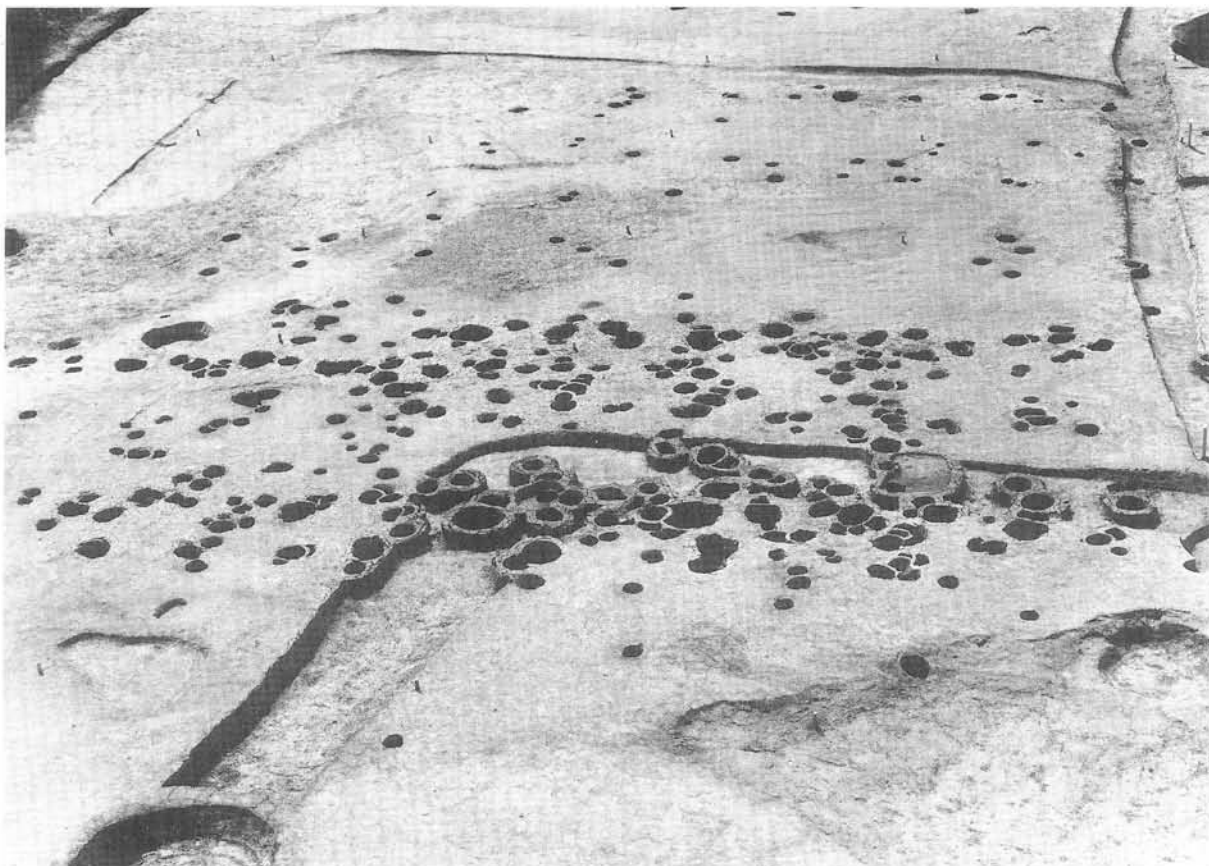


S D60~63 (東から)



S B78・79周辺 (北から)

PL10



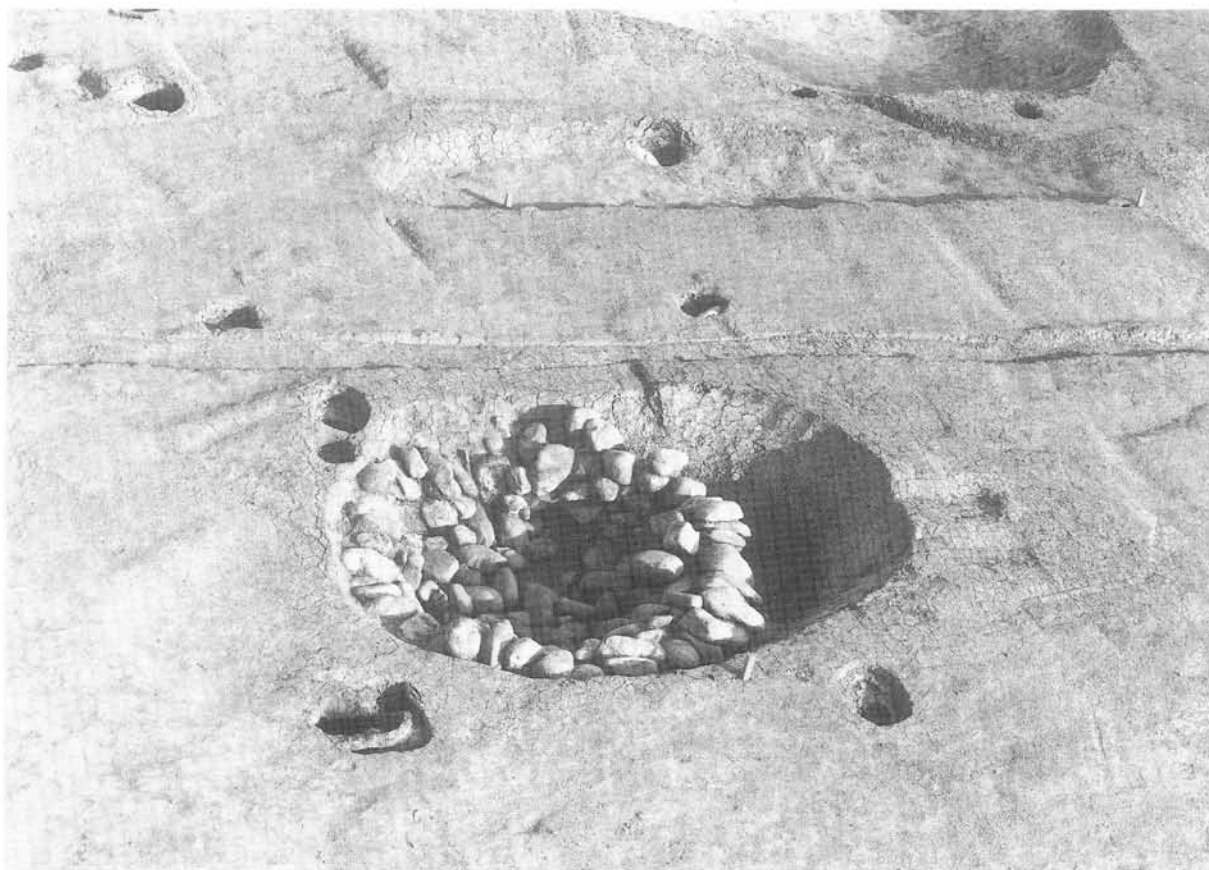
S B81~83, S D80, S K87・88 (北から)



S B101周辺 (南から)

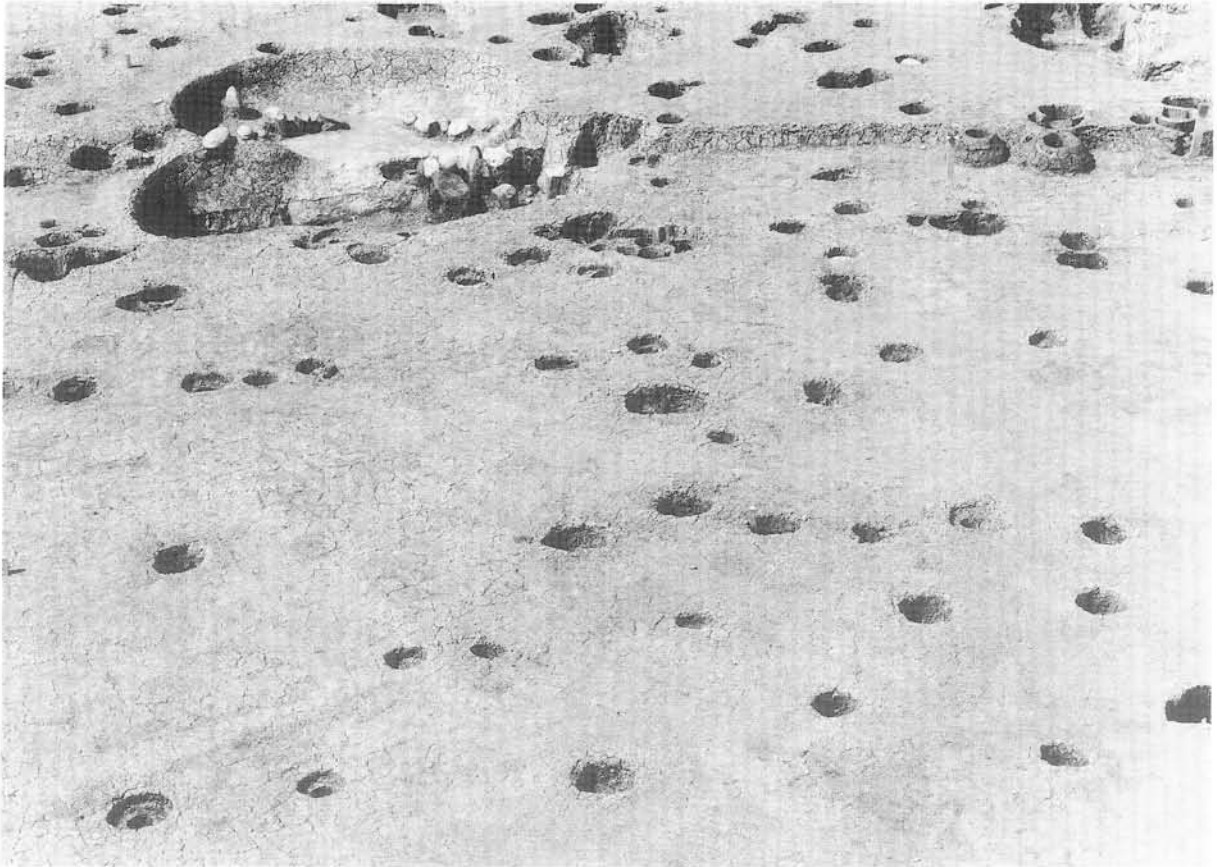


S E89 (西から)



S K106 (西から)

PL12



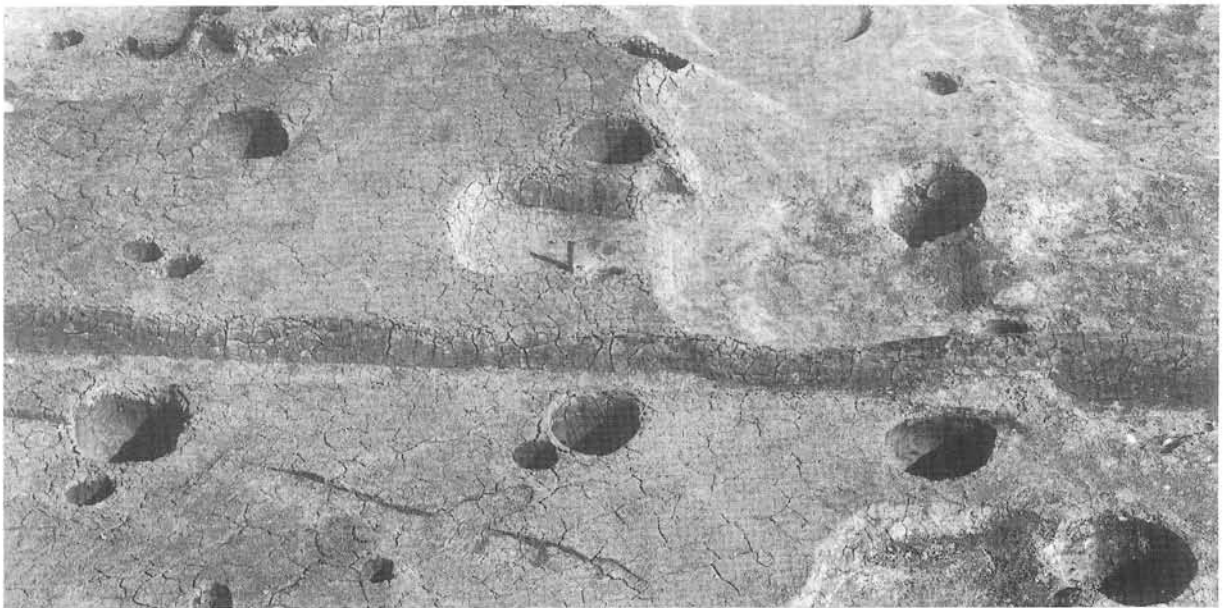
S B120, S K122 (東から)



S K129・133, 南土壘 (東から)



東土壘（北から）



S B136（西から）



山茶碗



中・近世陶器



風炉



木製品

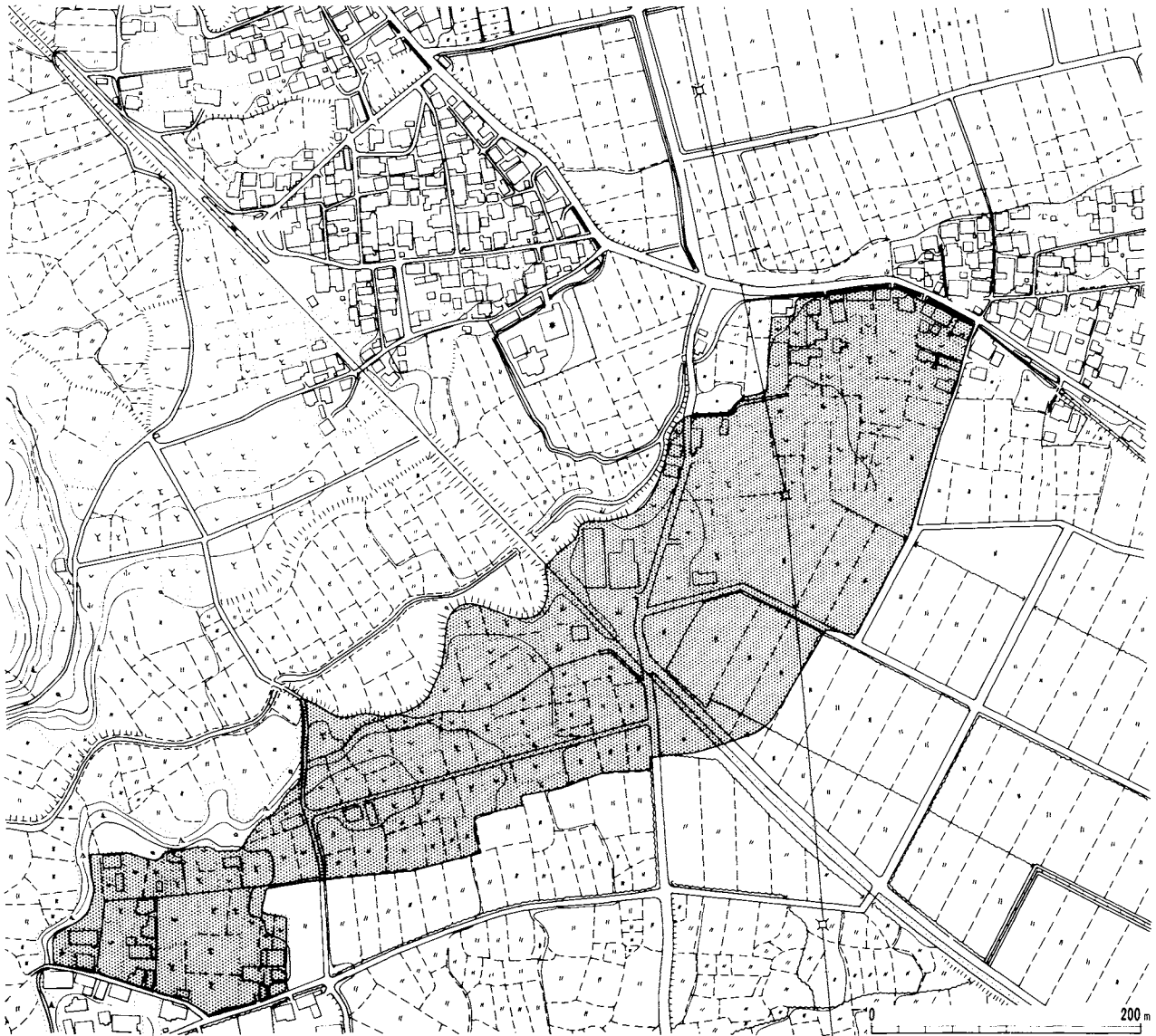
出土遺物

IV. 一志郡一志町小山 鳥居本遺跡

1. はじめに

伊勢平野のほぼ中央を流れる雲出川と一志丘陵沿いを流れる波瀬川の合流点から南西約1kmにある河岸段丘中位面上に鳥居本遺跡は所在する。標高は14m前後であり、行政区画上は一志郡一志町小山字鳥居ノ本ほかに属する。当遺跡周辺の雲出川右岸一帯は遺跡の宝庫と言われており、後期旧石器時代以降の人々の生活の跡が数多く確認されている地域である。

鳥居本遺跡は北東から南西に細長くのびる遺跡で、『一志町史』^①では県道丹生寺・一志線からJR名松線までの間をA遺跡、名松線の西をB遺跡、B遺跡の南西で段丘の西端付近をC遺跡と呼んでいる。このうち、B遺跡については、1973（昭和48）年度に一志町教育委員会によって発掘調査が実施され、弥生時代と飛鳥時代を中心とする遺跡であることが明らかに^②されている。



第14図 遺跡地形図（1：5,000）

今回、近畿自動車道が本遺跡を南北に貫くことになり、1987（昭和62）年5月に第1次調査を行った。その結果に基づき、同年9月から翌年3月にかけて6300㎡の本調査を実施し、翌1988年度は農道をはさんでそれに南接する2400㎡に本調査を行った。本報告は、1988年度の調査に関するものである。調査開始は1988年5月16日、終了は7月27日であった。

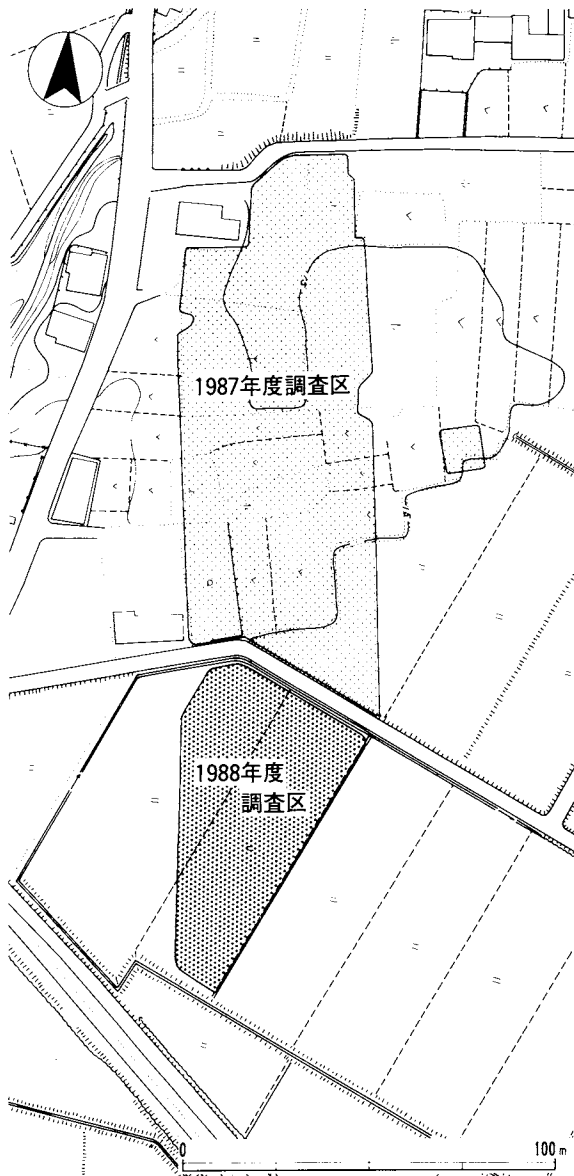
調査に際しての4m方眼の地区割は、原則に従って、東西方向にアルファベット（西から東へA'、

A、B……）、南北方向に数字（北から南へ1、2……）を与え、各グリッドの北西隅の杭の名称をそのグリッド名とした。基準杭は、S T A 263+60のセンター杭から見て、S T A 263+00のセンター杭より西へ82° 48' 55" の方向で14.928mの地点に設けた。また、上述の2本のセンター杭を結ぶ方向より東へ0° 54' 12" 振った方向を南北の基準の方向とした。

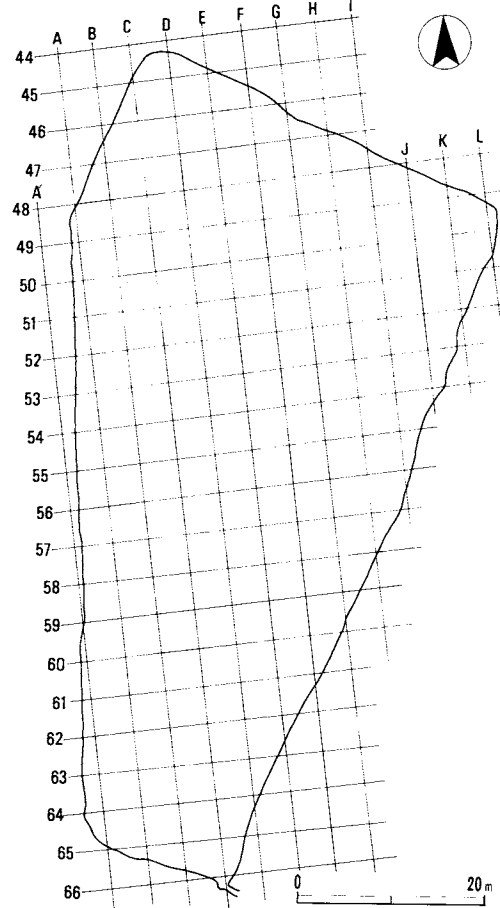
2. 層 序

鳥居本遺跡の層序は基本的には4層からなる。第1層は黒褐色の耕作土で、調査区南半では黒色土や

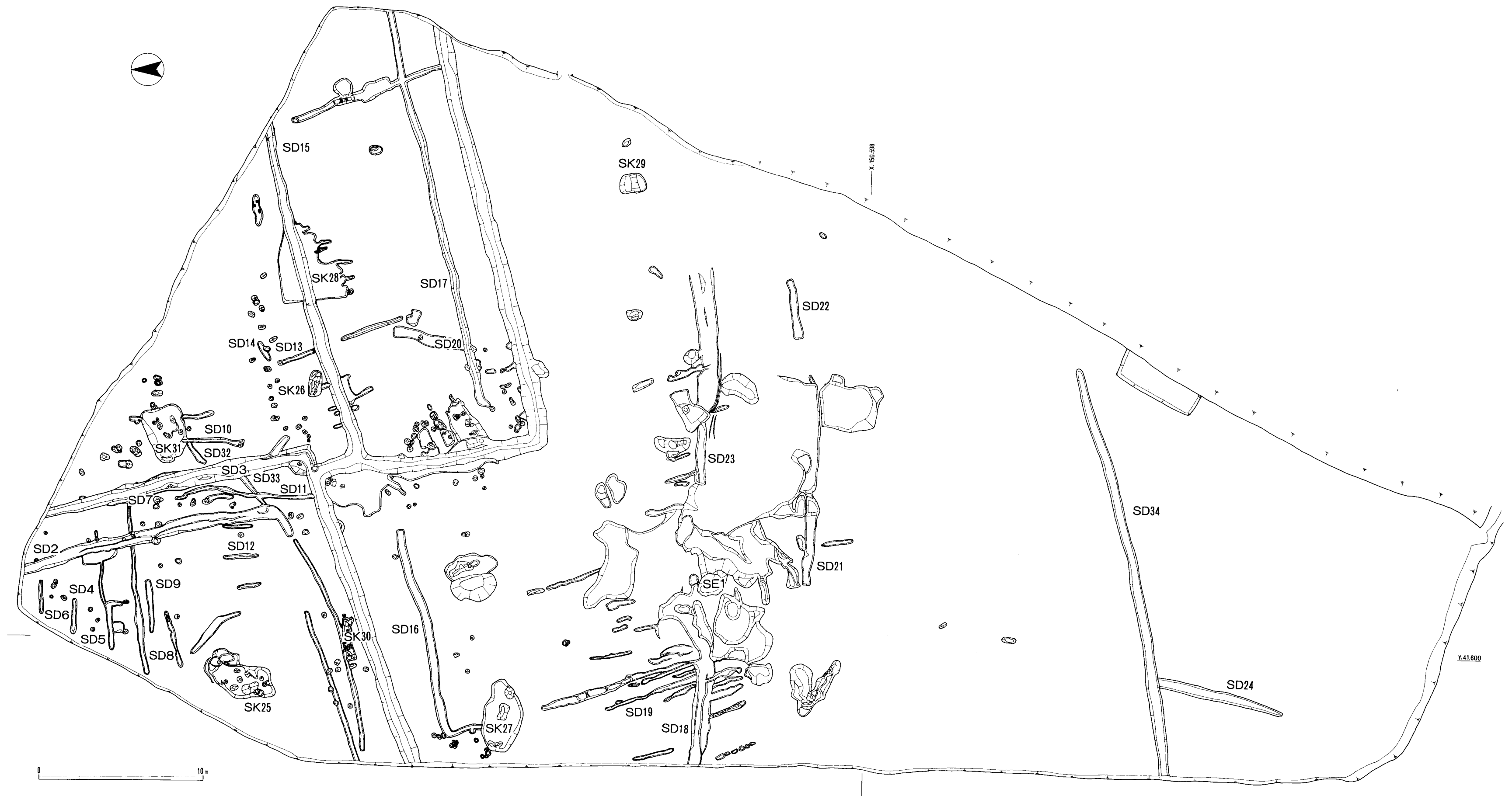
にぶい赤褐色の土が混じる。北部では明赤褐色粘質土の床土が認められる。第2層は暗赤褐色粘質土であるが、連続した層を成すのは北1/4ほどで、それより南は断続的に第3層の上に乗るのみとなる。第3層は黒色土（黒ボク）で、遺物包含層である。包含層の厚さは約10～30cmで、北部ほど明瞭に認められ、南部では部分的に包含層の認められないとこ



第15図 調査区位置図（1：2,000）



第16図 調査区地区割図（1：800）



第17図 遺構平面図 (1:200)

るもあった。第4層はにぶい褐色の粘質土で地山である。なお、北部では、床土と第2層との間に旧耕

作土と思われるにぶい赤褐色土の層が認められた。

3. 遺 構

検出された遺構には井戸と大小の溝・土坑・ピットがある。これらの殆どは調査区の北半に集中している。以下、個々の遺構について触れる。

(1) 井戸

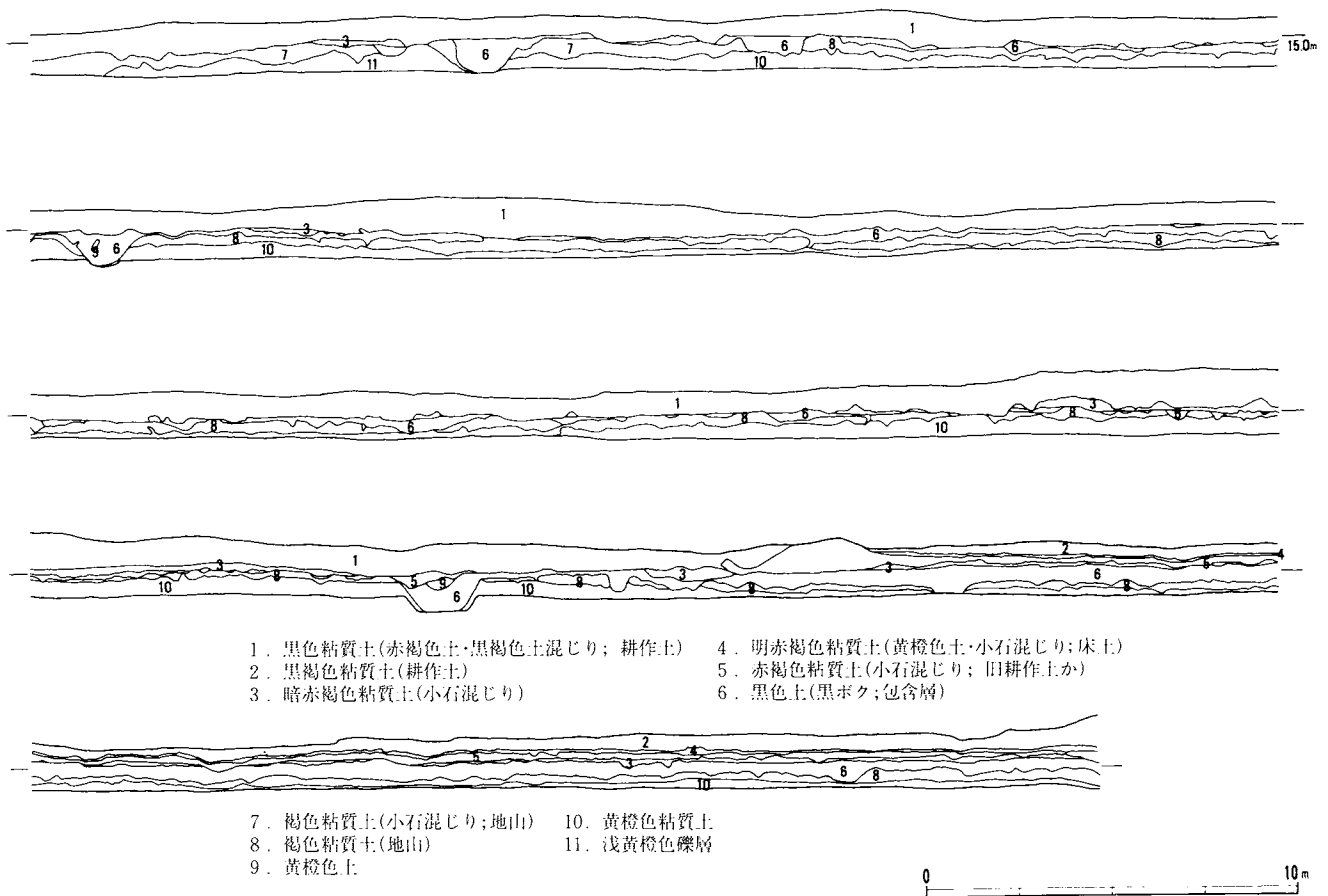
SE1 調査区中央やや西よりにある素掘りの井戸である。平面形は長径約1.4m、短径約0.9mの楕円形をなし、遺構検出面からの深さは約1mである。埋土は黒色粘質土（黄粒混じり）で、井戸の北半の深さ10cmから底までの間で土師器碗・杯・甕、須恵器杯等計9点が出土した。これらは飛鳥～奈良時代のもので、土師器甕を除くといずれも完形品である。

(2) 溝

SD2 調査区北西部にある溝である。調査区北

端から約16mはほぼ南北に走り、そこからほぼ直角に西へ屈曲して、一部消える箇所はあるものの、調査区西端近くまで約16m続いている。幅は、南北に走る部分と西へ曲がって約2mの間は約90cm、その後一旦途切れた後は20cm前後と細くなる。但し、南北方向のうち約10m分は、西側が高く東側が低い2段になっている。検出面からの深さは15cm内外であるが、2段になっている部分の西側は10cm前後である。埋土は濃暗褐色粘質土で、古墳時代後期の須恵器片や鎌倉時代の山茶碗の他、土師器片、鉄滓等が出土している。これらの殆どは南北方向の部分からの出土である。なお、切り合い関係より、SD2はSD8やSK7より新しい。

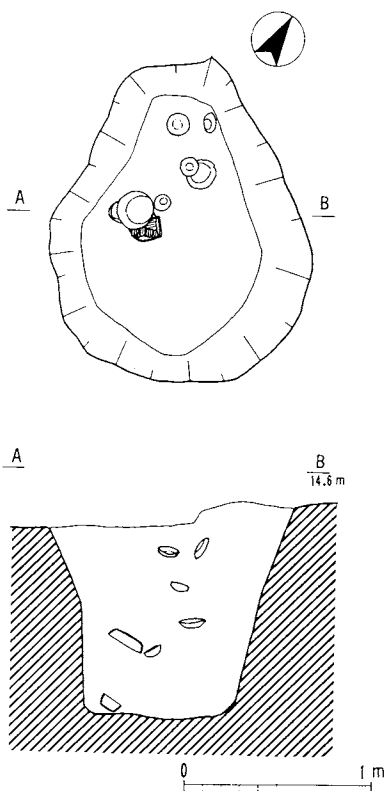
SD3 調査区北半を流れる溝で、30条をこえる



第18図 調査区西壁土層断面図 (1:100)

当遺跡の溝の中で最も規模の大きなものである。調査区北端から約16mの間、SD2の東約2mをSD2に平行して南北方向に走り、そこで直角に西へ曲がって、やはりSD2に平行して西端まで達する。また、南北方向にはクランク状に屈曲しながらさらに14mほど伸び、そこで直角に曲がって東端まで達する。幅は約1m、遺構検出面からの深さは約45cmである。埋土は黒色土（黒ボク）であるが、SD2に平行して東西方向に走る部分は黒色土の下に黄橙色粒混じりの褐灰色粘質土の層がみられた。遺物は、平安時代の黒色土器の他、須恵器、陶器等がSD2に平行する部分を中心に出土しているが、いずれも小片である。このSD3は、農道をはさんで北隣の前年度調査区で検出された大溝と連続する可能性があるが、さらに詳細な検討がなされねばならない。なお、SD2が前年度の大溝につながる可能性も残っている。また、切り合い関係からSD3、SD7、SD8の旧新関係はSD8→SD7→SD3の順に新しくなる。

SD4 調査区の北端近くをほぼ東西に走る溝で、2m分が検出された。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約15cmである。埋土は黒色土（黒ボク；明



第19図 SE1 遺物出土状況実測図（1：40）

褐色土混じり）で、土師器片が1点だけ出土している。

SD5 調査区北部の西端近くにある溝である。SD4の南約3mに位置し、東西方向に3m、東端で直角に南に折れて約1mの計4m分が検出された。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒色土（黒ボク；明褐色土混じり）で、遺物は平安時代の土師器片が1点だけ出土した。

SD6 調査区の北端近くにあり、ほぼ東西に走る溝である。SD4の北約2mに位置し、約2m分が検出された。遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒色土（黒ボク）で、土師器の細片が若干出土した。

SD7 調査区北部にある溝である。南北に約5m分が検出されているが、北及び東側はSD3に切られ、また、南へ行くほど不明瞭になる。幅は30cm以上、遺構検出面からの深さは約20cmである。埋土は黒色土（黒ボク）で、遺物は平安時代の灰釉陶器片、中世の土師器片・山茶碗片等が若干量出土している。切り合い関係から、SD3より古く、SD8より新しい。

SD8 調査区北部をほぼ東西に走る溝である。SD5とSD9のほぼ中央に位置し、途中SD2に切られる部分を含めて約10m分が検出された。東端はSD3に切られるが、SD3の東までは続かない。幅は約40cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。弥生土器片が2点出土している。

SD9 SD8の南約2mに位置し、ほぼ東西に走る溝である。約3.6m分を検出した。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約5cmで、西端のみ深さ約15cmの窪みになっている。土師器片が微量出土した。

SD10 調査区北部をほぼ南北に走る溝である。北端をSD32に切られ、SD32はまた、SK31に切られている。検出されたのは約3.5m分で、SK31の北までは続いている。幅は約25cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。飛鳥～奈良時代の土師器碗片が1点出土した。

SD11 調査区北部のSD2とSD3の間に位置し、ほぼ南北に走る溝である。約7m分を検出した。南端は東西に走るSD3に切られ、SD3の南には

そのオーバーフローと思われる不定形の窪地があるため、SD11がどこまで続いているかは不明である。また、切り合い関係からSD33より新しい。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。出土遺物は土師器の小片が1点のみである。

SD12 調査区北部を南北に走る溝である。SD2の西約3mに位置し、約3m分が検出された。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒色土(黒ボク)で、出土遺物は土師器の小片が1点のみである。

SD13 調査区北東部をほぼ南北に走る溝である。SD15にほぼ直交し、切り合い関係からSD15より古い。検出されたのは約2.4m分、幅は約20cm、遺構検出面からの深さは約7cmである。出土遺物は土師器の小片が1点のみである。

SD14 調査区北東部をほぼ東西に走る溝である。SD13の北端近くにあり、約1.3m分が検出された。幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約5cmである。土師器の小片が2点出土している。

SD15 調査区北部をほぼ東西に走る溝である。西端はSD3にぶつかり、東は調査区外へのびる。検出されたのは約21m分、幅は約80cm、遺構検出面からの深さは約40cmである。埋土は、上から黄橙色粒混じりの黒褐色粘質土、黄橙色粒混じりの黒色土(黒ボク)、黄橙色粒混じりの褐灰色粘質土の3層に分かれる。幅と深さがSD3に酷似し、SD3の一部である可能性もあるが、層序からみて、少なくとも埋没しきったのはSD3より後と考えられる。遺物は土師器、須恵器の小片が若干であり、近世以降と思われる陶磁器片も混じる。

SD16 調査区西部にある溝である。西壁に向かうSD3の南約2.5mをほぼ東西に約13m走り、西端でほぼ直角に南に曲がり、約2mでSK4に切られる。幅は20~50cm、遺構検出面からの深さは5~15cmである。土師器、須恵器の小片が若干出土している。

SD17 調査区東部をSD10に平行してほぼ東西に走る溝である。SD3の北約2.3mに位置し、東は調査区東端まで達しており、検出されたのは約24m分である。幅は約45cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒色土(黒ボク)で、中世の土師器片が若干出土している。切り合い関係からSD20

より新しい。

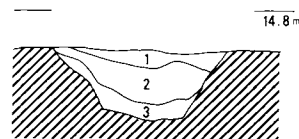
SD18 調査区西部をほぼ東西に走る溝である。SE1の西約3mに位置する。埋土は黒褐色粘質土で、西壁から約9m分が検出されたが、その東は黄色粒の混じる黒褐色粘質土が不定形に広がっており、SD18がさらに東に続くかどうかは確認できなかった。この一帯は大きな窪地になっており、調査区の中で最も低い。SD18の幅は約45cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。遺物は、調査区西端に近い所では中世の土師器片、陶器片等が多いが、東の窪地に近い所では弥生時代~中世までの遺物がみられる。なお、SD18に交わる数条の細い溝は切り合い関係からSD18より古いものである。

SD19 調査区西部をほぼ南北に走る溝である。約5.5m分が検出され、南端はSD18に切られる。幅は最大で約50cmであるが、北へいくほど細くなる。遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒・明黒褐・暗黄の混じり合った粘質土、遺物は土師器の小片が微量出土したのみである。

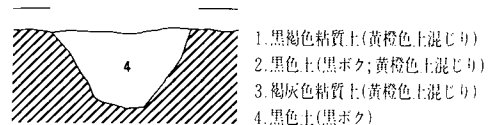
SD20 調査区東部をほぼ南北に走る溝である。約4.6m分が検出され、南端はSD17に切られる。幅は約60cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は土師器の細片が1点のみである。

SD21 調査区中央部をほぼ東西に走る溝である。SE1の南約4.6mに位置し、約4m分が検出され

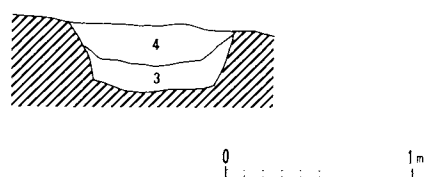
SD15(F49:西から)



SD3(E45:北から)



SD3(D49:西から)



第20図 SD3・15断面図(1:40)

た。幅は約50cm、遺構検出面からの深さは8cm程度である。埋土は黒褐色粘質土で、土師器の細片が若干出土している。

S D22 調査区東部をほぼ東西に走る溝である。S D21の東約10mに位置し、約3.5m分が検出された。幅は約50cm、遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘質土で、飛鳥時代の土師器碗など若干の遺物が出土した。S D21・22はほぼ同一ライン上にあり、このラインより南では遺構は殆どみられない。

S D23 調査区中央部をほぼ東西に走る溝である。S E 1の東約5.3mの所から約12.6m続いているが、東へ行くほど浅く不明瞭になる。幅は西半で約50cm、東半で約130cmである。遺構検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘質土で、出土遺物は土師器の小片が1点のみである。

S D24 調査区南部をほぼ南北に走る溝である。約8m分が検出され、S D34の南壁を切っているが、S D34より北へは続かない。幅は約45cm、遺構検出面からの深さは中央部で10cmを越えるが、両端は浅い。埋土は黄色粘土粒混じりの黒色土（黒ボク）で、

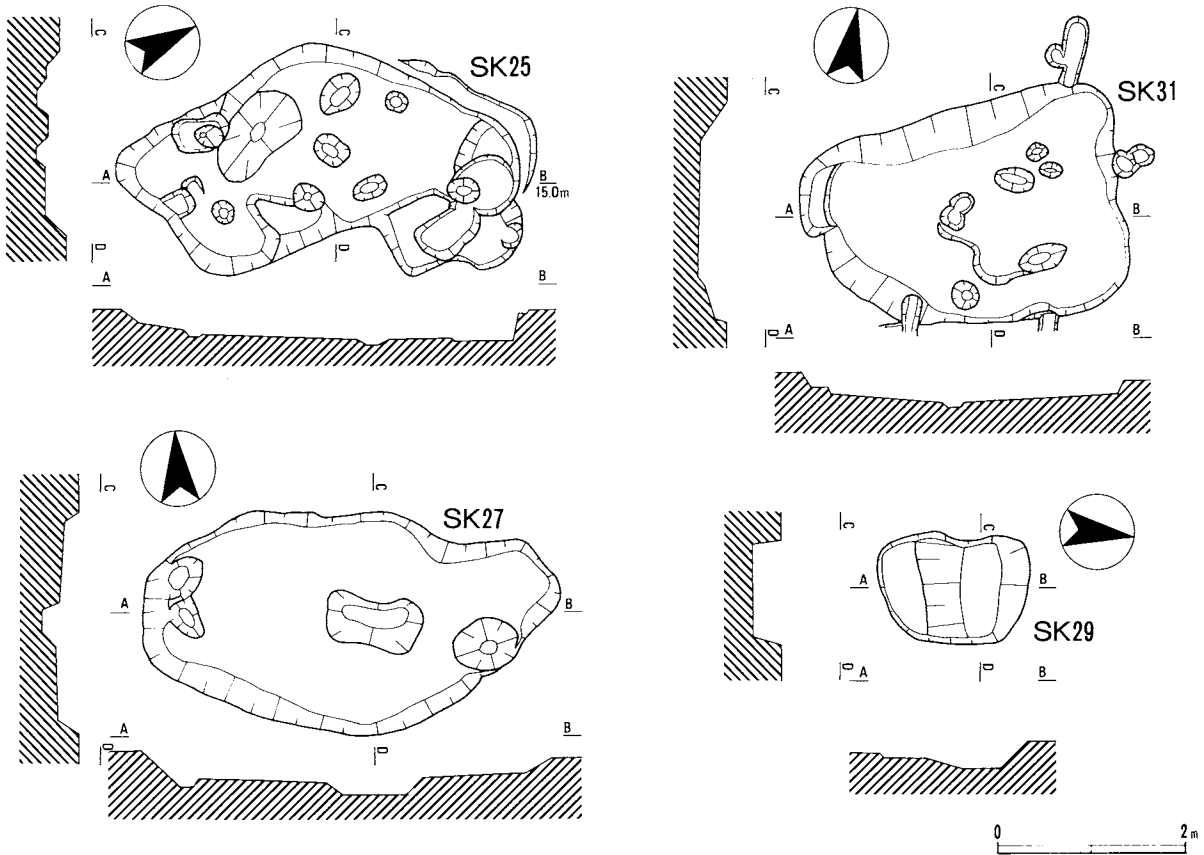
中世の土師器片が若干出土している。

(3) 土坑

S K25 調査区の北西隅付近にある土坑である。「L」字状をしており、長さ約5m、幅約2mである。遺構検出面からの深さは20~40cmで、底にはかなり凹凸がある。埋土は黒色土（黒ボク）で、遺物は奈良時代前半の土師器杯・皿・甕等が出土している。S E 1に次ぐ出土量である。

S K26 調査区の北部、S D15の北岸に位置する土坑である。東西約1.6m、南北約0.8mで、ほぼ長方形である。北及び東隅に1~2段の小さなテラスを有し、中央南寄りには遺構検出面からの深さ約40cmのピット状の落ち込みとなっている。埋土は黒色土（黒ボク）で、土師器が若干出土している。

S K27 調査区西壁際、中央やや北寄りに位置する土坑である。S D16を切っており、東西4.4m、南北2.4mで、平面形は楕円形である。遺構検出面からの深さは約25cmで、底面より10~40cmの窪みが西端に2つ、中央やや東寄りに1つ、東端に1つある。埋土は黒色土（黒ボク）で遺物には平安時代の甕等の土師器片や須恵器片がある。



第21図 S K25・27・29・31実測図 (1 : 80)

S K 28 調査区北部、S K 26の東約4 mに位置する土坑で、S D 15と重複している。東西4.9 m、南北4.3 mのほぼ方形になるのではないかと思われるが、東辺及び南辺は不明瞭である。遺構検出面からの深さは5～10 cmで、南ほど浅くなる。埋土は暗褐色の粘土（黄粒混じり）で、これを除去するとS D 15が現れる。出土遺物は土師器や陶器の小片ばかりである。

S K 29 調査区東部にある土坑である。南北1.6 m、東西1.2 mで、台形状を呈する。遺構検出面からの深さは約30 cmであるが、南側に底面より10 cm高いテラスがある。埋土は暗灰褐色の粘質土で、遺物は土師器片、須恵器片等微量である。

S K 30 調査区北西部に位置する土坑である。S D 2とS D 3の間に位置し、一部S D 2に切られて

いる。また、南東隅はピットに切られている。長さ約1.4 m、幅約50 cmの東西に細長い長方形の土坑である。遺構検出面からの深さは約20 cmで、中央と東端に若干の窪みがある。埋土は明褐色粘土混土で土師器片が若干出土している。

S K 31 調査区北端近く、S D 3のすぐ東に位置する土坑である。東西約3.4 m、南北約2.4 mで、ほぼ台形状を呈し、S D 10をはじめ、3本の溝を切っている。遺構検出面からの深さは約25 cmで、ピット状の窪みが数ヶ所ある。埋土は黒色土（黒ボク）で、遺物は飛鳥～奈良時代の土師器杯・甕をはじめ、土師器片が当遺跡としては多量に出土している。特に、中央やや南西寄り破片がまとまって出土した。また、その南東隣で明赤褐色砂質土の高まりが検出された。

4. 遺物

遺物は整理箱に約10箱分出土した。土師器、須恵器が主で、他に山茶碗、常滑焼等の陶器が若干混じる。調査区全域から出土したが、量としては少なく、かつ大半は小片である。また、殆どが遺構に伴うもので、包含層からの出土遺物は極めて少ない。以下、遺構別に個々の遺物について触れたい。

(1) S E 1 出土遺物

土師器碗 (1・2) (1)は底面から40 cm、(2)は底面から90 cm上で出土した。いずれも完形ないしほぼ完形である。(1)は口径10.8 cm、器高4.1 cmである。口縁部が外上方にのび、端部は若干内弯気味に丸くおさめられている。底部外面には木の葉圧痕がみられ、体部～口縁部外面は横及び斜め方向のナデ、内面はヨコナデ、底部内面はナデが施されている。胎土には1～数 mm大の砂粒が散在し、焼成は並み、色調は淡黄色である。(2)は口径13.4 cm、器高3.8 cmである。粘土帯のつなぎ目が明瞭に観察されるが、内外面とも磨耗が激しく、調整技法は不明である。胎土は密であるが、1 mm以下の砂粒を大量に含む。焼成は並みで、色調は浅黄橙色である。

土師器杯 (3) S E 1の底面から40 cmほど上で出土した。完形品で、口径18.6 cm、器高5.6 cmである。口縁部は外反気味で、端部は丸く巻き込まれている。

底部外面は最外面が殆ど剥落しているため確かなことは言えないが、ヘラ削りの後ナデられているようである。体部から口縁部にかけての外表面はヨコナデされている。底部と体部の内面に螺旋状と放射線状の暗文が施されている。胎土・焼成ともに極めて良好、色調黄橙色の畿内的な土器である。

土師器杯蓋 (4) S E 1の中程で出土した。つまみの一部を欠くが、口径15.4 cm、器高5.1 cmである。口縁部は下外方にのび、端部は尖り気味に丸くおさめられている。胎土は密で焼成も良好、色調は橙色である。

土師器甕 (5) S E 1の底面で上から押しつぶされた状態で出土した。底部を欠くが、口径15.2 cm、胴部最大径16.7 cm、器高は推定で15.5 cmである。口縁部は「く」の字形に外反し、端部が若干上方につまみあげられている。胴部はほぼ球形である。胴部外面には縦方向の刷毛目が施されており、上半は1 cmあたり6～7本と粗く、下半は12本と細かい。胴部内面はヘラケズリされ、口縁部内外面はヨコナデされている。また、口縁部内面には1 cmあたり6～7本の横方向の刷毛目が残存する。胎土は1 mm大の砂粒を含み、焼成はやや甘い。色調は浅黄橙色である。

須恵器杯蓋(6~8) いずれも完形で、SE1の上部から出土した。口径は10.8~11.2cm、器高は3.1~3.5cmである。天井部は(6)が丸みを帯びるが、(7)と(8)は平坦である。口縁部は(6)と(7)がほぼ下方へのび、(8)はやや外開き気味である。端部はいずれも丸くおさめられている。天井部外面はいずれもヘラ切り未調整、内面は中央部が一方にナデられている。胎土は(6)と(8)が良好、(7)は粗砂が混じる。色調は(6)が青灰色、(7)が灰白色、(8)が明緑灰色である。

須恵器杯身(9) SE1の底面直上で出土した。完形で、口径11.6cm、器高3.4cmである。底部は平らで、口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部外面はヘラ切り未調整、内面中央部は一方のナデ、他の部分はロクロナデが施されている。胎土、焼成共に良好で、色調は体部の1/3と底部が青灰色、他の部分が明紫灰色である。

(2) SK25出土遺物

土師器椀(10) 約1/2が残存し、推定口径10.8cm、器高3.6cmである。口縁部は若干内傾気味で、端部は丸くおさめられている。調整は内外面ともナデである。胎土・焼成ともに良好、色調は橙色である。

土師器杯(11・12) 残存度はともに1/3程度である。推定口径15.3~15.4cm、器高3.8~3.9cmと法量は近似している。(11)は体部から口縁部がほぼ直線的に外上方へのび、端部は丸くおさめられているが、若干の段がみられる。底部内外面にナデ、体部~口縁部内外面に横ナデが施されている。(12)は口縁部が少し外反したのち内湾し、端部は丸くおさめられている。口縁部内外面に横ナデが施され、底部外面には不徹底なヘラ削りがみられる。ともに胎土・焼成は良好、色調は橙色である。

土師器皿(13) 約1/4が残存し、推定口径16.8cm、器高2.5cmである。底部外面は指オサエによる凹凸が目立ち、口縁部は外反する。底部内外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施されている。胎土・焼成ともに良好、色調は淡橙色である。

土師器甕(14) 口縁周辺の約1/3が残存し、推定口径は17.1cmである。口縁部は「く」の字形をなし、端部は丸くおさめられている。口縁部内外面に

はヨコナデが施されている。体部外面には縦方向の刷毛目がみられ、内面はヘラ削りが施されている。胎土・焼成ともに良好、色調は淡黄橙色である。

(3) SK31出土遺物

土師器杯(15・16) (15)は約1/3が残存し、推定口径は12.8cm、器高3.5cmである。口縁部は僅かに外反し、端部は尖り気味である。底部内外面にナデ、口縁部にヨコナデが施されている。(16)は約1/10が残存し、推定口径は13.8cm、器高2.8cmである。口縁部は若干外反し、端部は丸くおさめられている。調整は(15)と同様である。ともに胎土・焼成は良好、色調は橙色である。

土師器甕(17) 口縁周辺の約1/10が残存し、推定口径は18.6cmである。口縁部は「く」の字形をなし、外面にヨコナデが施されている。体部外面には縦方向の刷毛目がみられる。胎土・焼成ともに良好、色調は橙色である。

(4) SK29出土遺物

須恵器杯身(18) 約1/10が残存し、推定口径は11.6cm、器高3.5cmである。底部は平らで、口縁部は一旦外反した後やや内傾し、端部は丸くおさめられている。底部外面はヘラ切り未調整である。胎土・焼成ともに良好、色調は褐灰色である。

(5) SK27出土遺物

土師器甕(19) 口縁周辺の約1/6が残存し、推定口径は18.6cmである。口縁部は「く」の字形をなし、端部は若干立ち上がり気味である。口縁部内外面はヨコナデされている。胎土には1mm大の砂粒が混じるが焼成は良好、色調は橙色である。

(6) SD11出土遺物

土師器椀(20) 約1/2が残存し、推定口径11.8cm、器高4.0cmである。口縁部端部が僅かに外反し、口縁部外面にヨコナデ、他にはナデが施されている。胎土は良好、焼成は並み、色調は橙色である。

(7) SD2出土遺物

山茶椀(21) 約1/4が残存し、推定口径は15.4cm、同高台径7.4cm、器高5.5cmである。体部はほぼ直線的で、口縁部が僅かに外反する。高台は、断面形が低い逆三角形を呈し、外開き気味に貼りつけられているが、ところどころ剝離している。胎土・焼成ともに良好、色調は灰白色である。

(8) ピットからの出土遺物

土師器甕 (22) 口縁周辺の一部が残存し、推定口径は21.9cmである。口縁部は「く」の字形をなし、端部は上方に若干つまみ上げられ気味である。口縁部内外面はヨコナデされ、体部は外面に縦方向の刷毛目がみられ、内面はヘラ削りされている。胎土・焼成ともに良好、色調は浅黄橙色である。

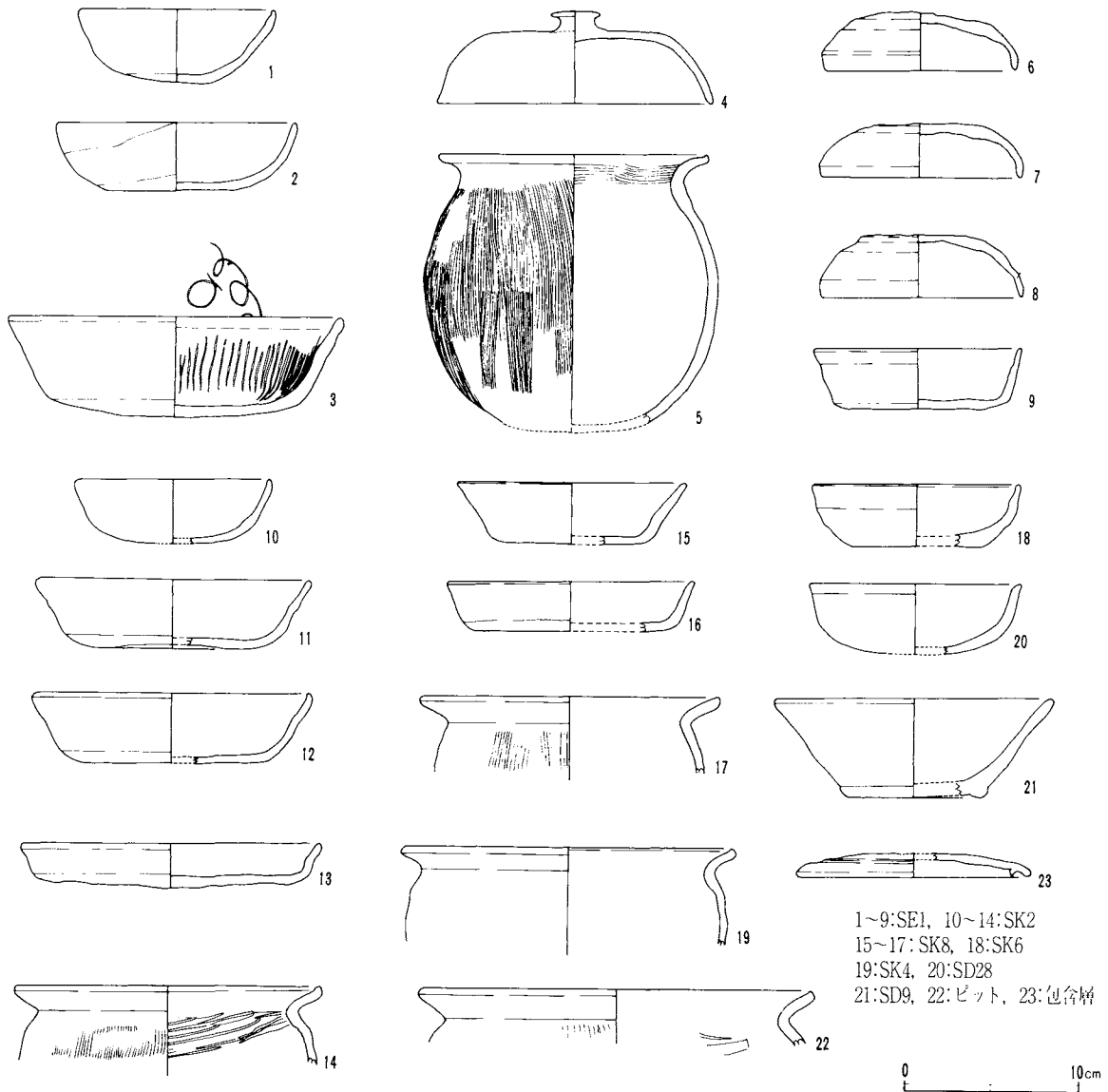
(9) 包含層出土遺物

須恵器杯蓋 (23) 約 1/6 が残存し、推定口径 13.0cm である。天井部外面にはつまみの剝離した痕跡がある。調整は、天上部の外面が右回りの回転ヘラ削り、同内面はナデである。体部～口縁部の内外面はロクロナデである。なお、口縁部内面はかえりを貼り付けた後ロクロナデされている。胎土・焼成ともに良好、色調は灰白色である。

5. 結 語

今回の調査は、前年度の続きとして行われたもの

で、面積も前年度の 1/3 強にすぎない。従って、



第22図 遺物実測図 (1 : 4)

2か年にわたる調査結果を総合的に分析・検討しない限り本遺跡を正しく理解したことはないわけであるが、さしあたり、今回の限られた範囲における調査の中で気付いた点を記しておきたい。

1. 当地区は集落の南縁であった。調査区の中央部が東西に帯状に低くなっており、水はけがかなり悪い。ちょうどその一帯と居住区を区画するかのようになり、一直線ではないもののSD10がほぼ東西に走っており、この溝が集落の南限であった可能性が高い。ただし、今回の調査では住居跡は検出されておらず、実際の居住空間の南限はもう少し北であったと考えられる。
2. 中央部で検出されたSE1は、飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。この井戸の調査は常に排水しながら行わなければならない、掘削終了後も中程

まで水をたたえていた。こうした状態が当時も同様であったとすれば、この井戸の利用は容易であったろう。しかし、前年度の調査で平安時代のものなど井戸3基が検出されており、利用される井戸の位置は北へ移ったようである。ちなみに、前年度、SE1から北へ約60mのところ飛鳥時代の竪穴住居が検出されている。

3. SD3は少なくとも平安時代までは存続していたと考えられる。この溝と前年度検出の大溝とがつながる可能性がある点については既に触れた通りである。

以上、大雑把な記述に終始した。繰り返しになるが、前年度調査区の分析結果をふまえて。上述の点は必ず再考されねばならない。

註

① 『一志町史』 1981. 3

② 一志町教育委員会『鳥居本遺跡発掘調査報告』1975

③ 三重県教育委員会『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化

財発掘調査概報Ⅳ』 1988. 3

④ 註③に同じ

⑤ 註③に同じ

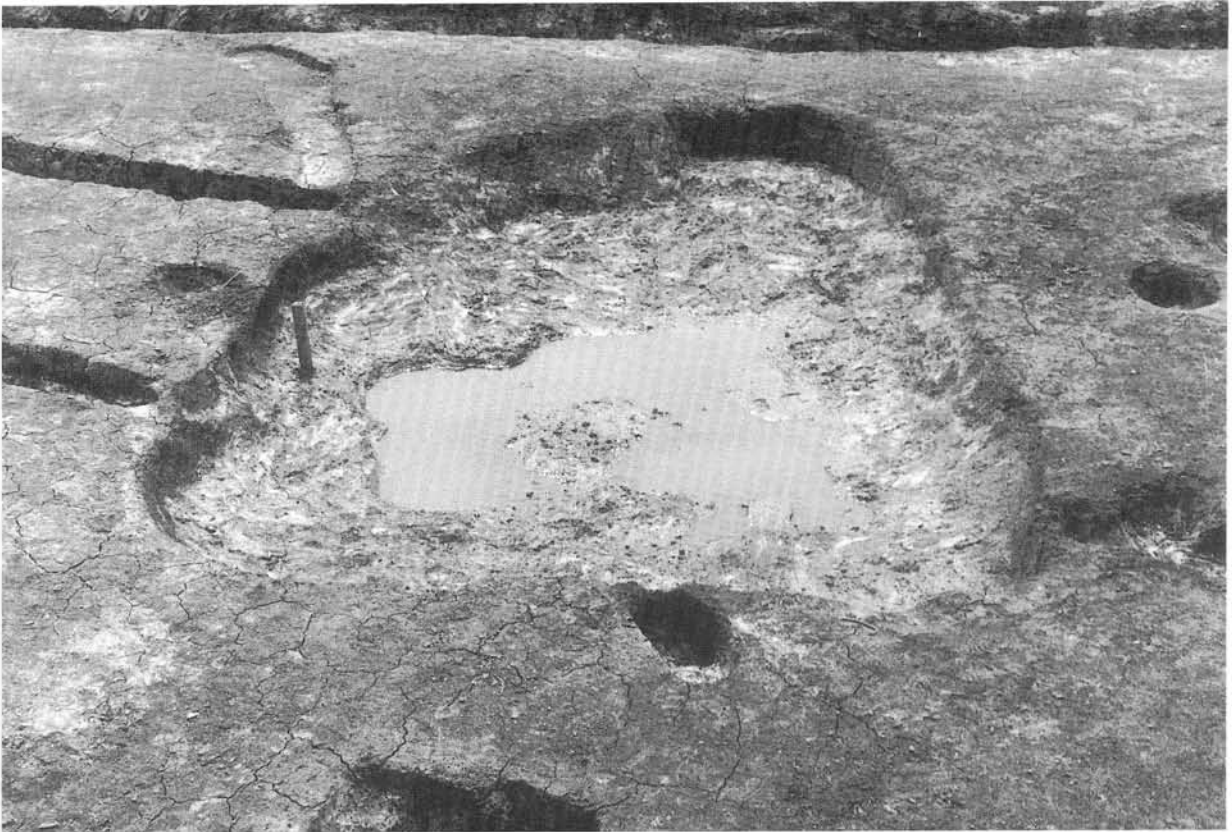


調査区全景（北から）

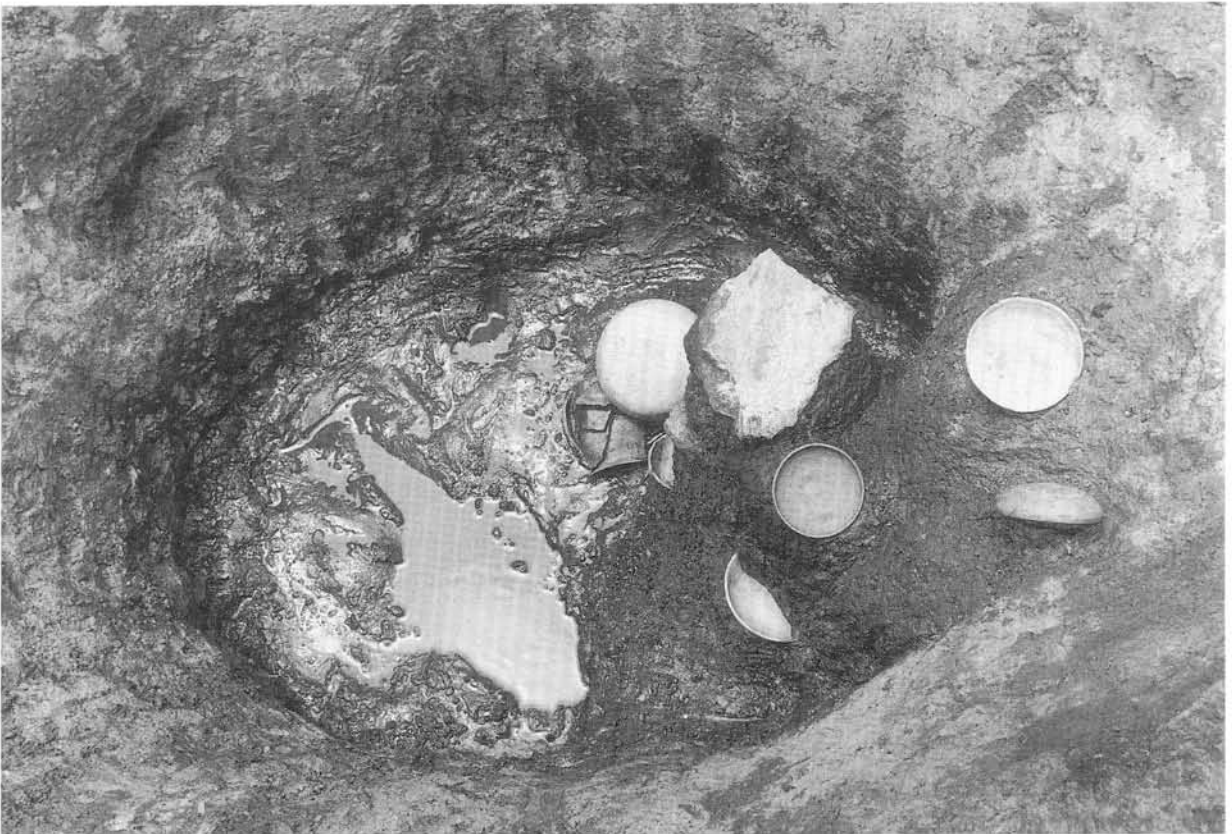


SK25（南東から）

PL 2



SK31 (北東から)



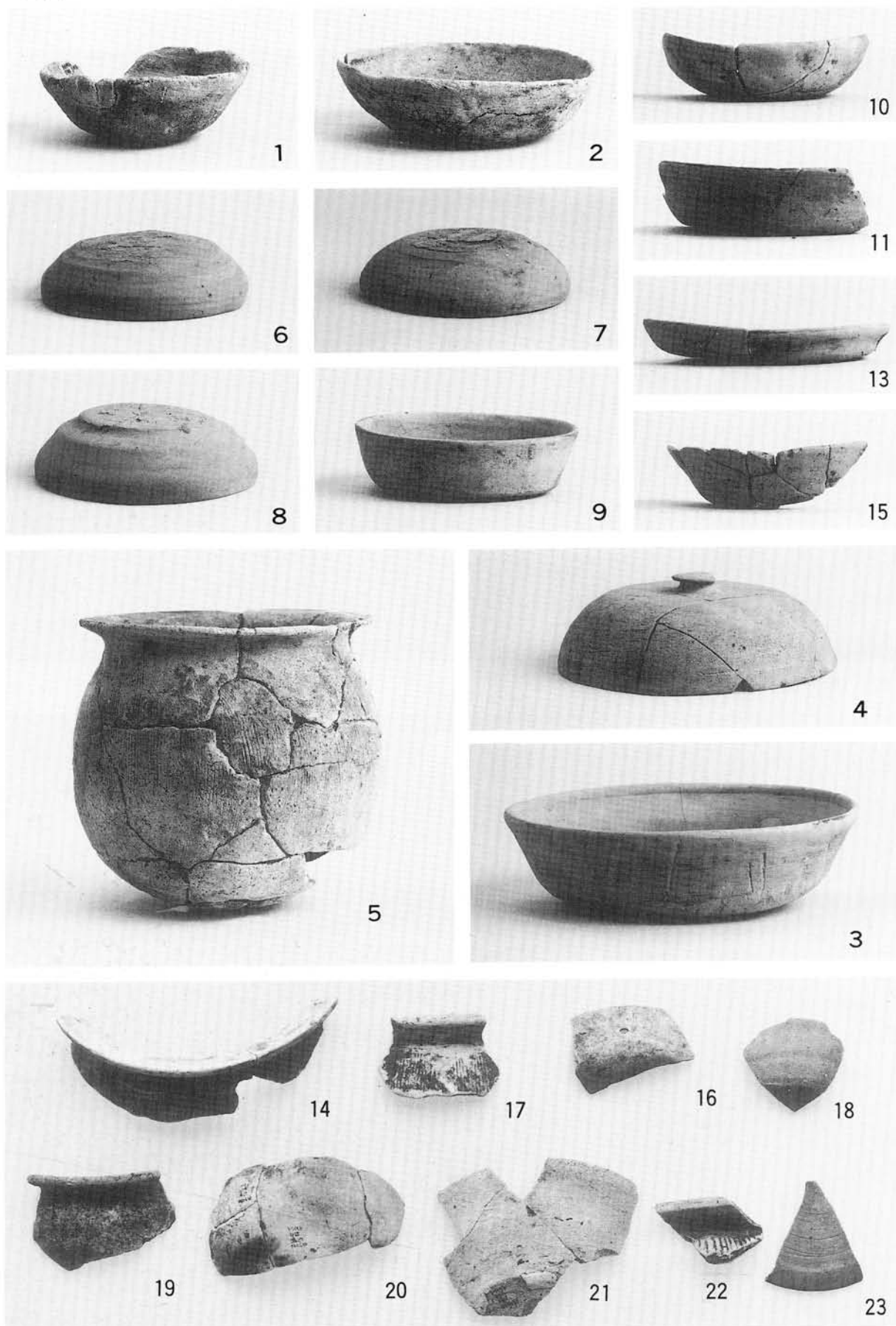
SE 1 遺物出土状況 (東から)



S K 27 (西から)

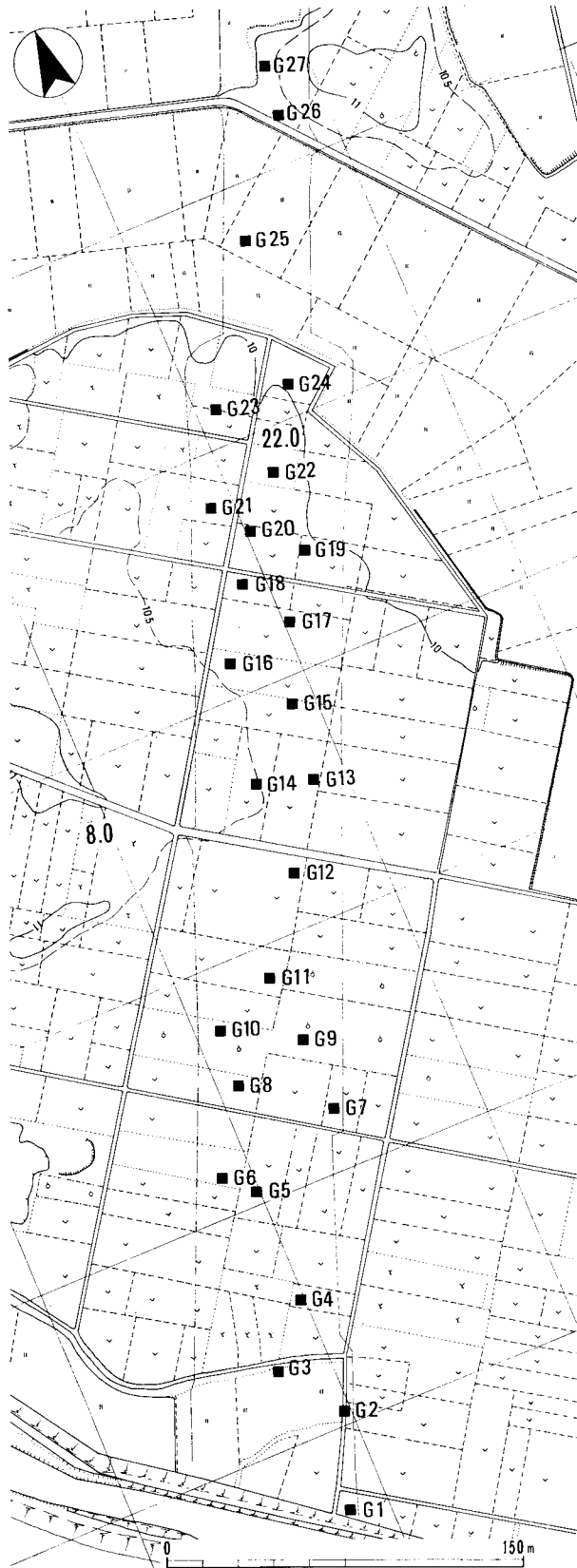


S D 3 (西から)



出土遺物 (1 : 3)

V. 久居市小戸木遺跡



第23図 調査区位置図 (1 : 3000)

当遺跡は雲出川左岸に広がる沖積平野内の微高地に所在する。現況は畑地である。

第1次調査は昭和61年度(昭和62年3月3日~同年3月5日192㎡)と昭和62年度(昭和62年9月20日~同年9月24日240㎡)に行った。調査面積は合計432㎡である。

61年度の調査は4m×4mのグリッド12箇所(G1~G12)で実施した。しかし、遺構の検出、遺物の出土はなかった。基本的な土層の層序は第I層褐色土(耕作土)、第II層明褐色砂質土(シルト層)、第III層灰白色砂質土(砂層)から成る。

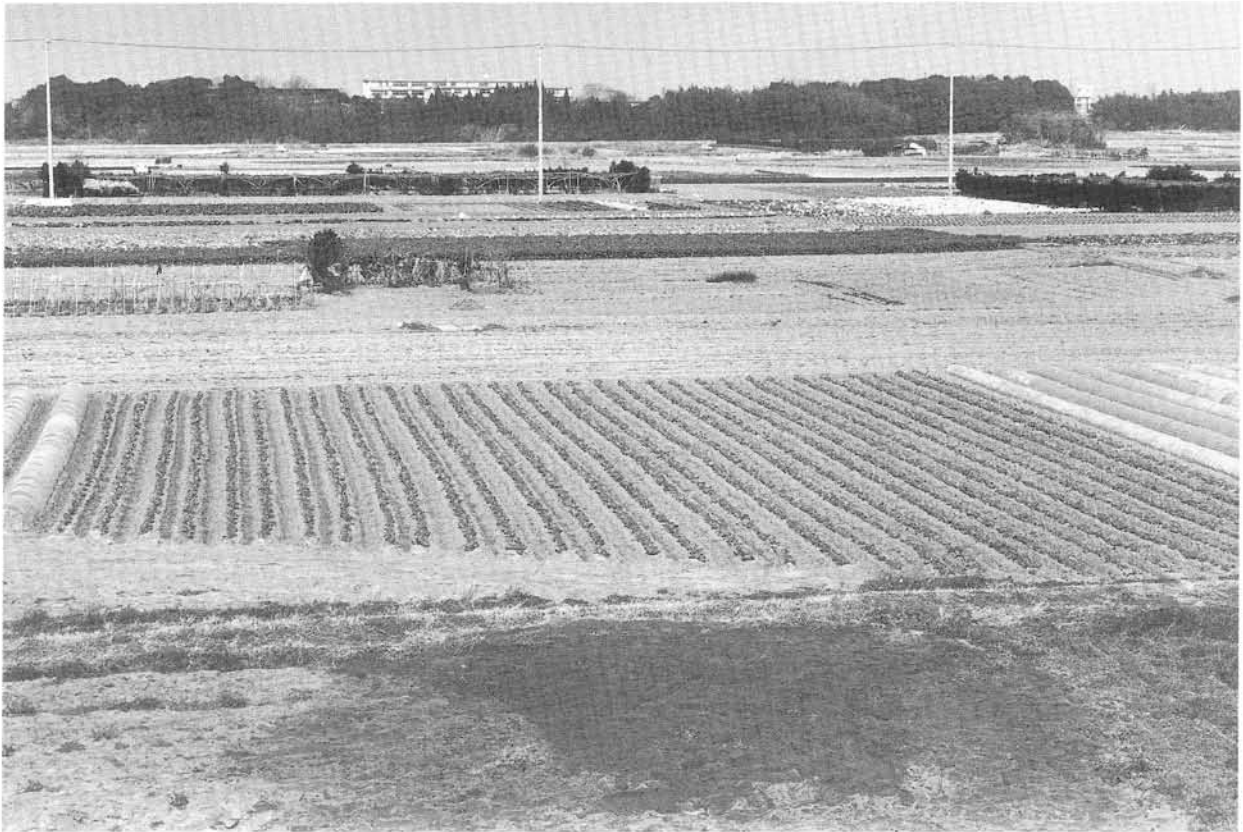
62年度の調査は4m×4mのグリッド15箇所(G13~G27)で実施した。表土には中世(鎌倉~室町時代)の土師器片等が散布していたが、グリッドからの遺構・遺物はなかった。基本的な土層の層序は第I層褐色土(耕作土)、第II層明褐色砂質土(シルト)、第III層灰白色砂質土(砂礫層)から成る。第III層までの深さは、浅いグリッドで約60cm、深いグリッドで約1.2mである。第I層から第II層の変わり目は漸次的である。第I層には若干量の土師器片が見られたが、磨耗しており、河川による流入物と推定される。第III層以下の状況より、この地域は河川による氾濫原が広がっていたことが分かる。

以上の結果により、小戸木遺跡の本調査は実施に至らなかった。



小戸木郷由来の碑

PL 1



調査区全景（南から）



グリッド 2

VI. 一志町庄村 庄村遺跡

当遺跡は、雲出川右岸の沖積地に所在する。現況は一部畑を含むが大部分は水田である。

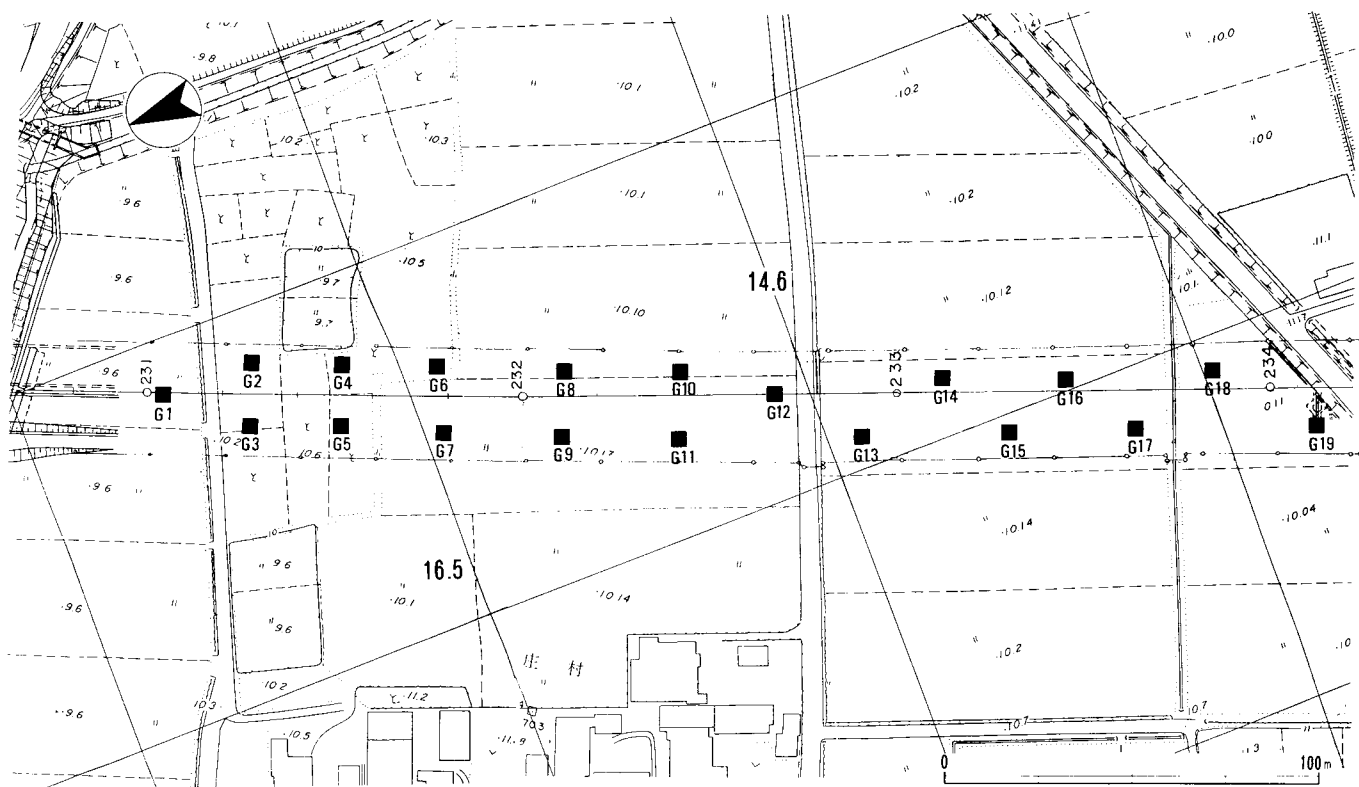
第1次調査は昭和62年9月14日～同年9月20日にかけて行った。調査面積は304㎡である。

調査は4m×4mのグリット19箇所（G1～G19）で実施した。表土層の除去は機械を使用し、以下は人力による掘削を1層ずつ行った。特に、表土に中世（鎌倉～室町時代）の遺物散布の多いG2～G5については、1.5mの深さまで確認した。

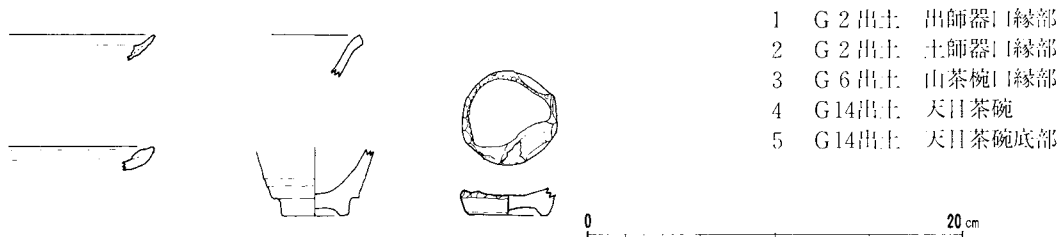
その結果、全てのグリットで現在の耕作土、床土

の下に旧耕作土が確認され、近世以降に現在の水田面が形成されていたことが判明した。さらに旧耕作土の下に、床土、少量の遺物（土師器片）を含む灰褐色シルト層が3層見られた。シルト層の遺物は河川による流入物と推定される。1.0m～1.4mの深さで黄褐色砂（細砂）層が検出された。生活面はどの層からも確認できなかった。

以上から、当遺跡には安定した生活面はなく、中世からの自然堆積層の累重と判断される。よって、庄村遺跡の本調査は実施しなかった。



第24図 調査区位置図（1：2,000）



第25図 出土遺物実測図（1：4）

PL1



調査前風景（南から）



調査前風景（東から）

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-11

近畿自動車（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

—第5分冊—

1991（平成3）年3月31日

編 集 三重県埋蔵文化財センター

発 行 三重県教育委員会

印 刷 東海印刷株式会社
